增補雅言集覽

四

813.6
I619g
Vol.8

813.6
I619g
Nw

帝国図書館蔵書

国立国会
41.3.31
図書館

691320

増補雅言集覽卷之四

石川雅望　集
中島廣足　補

○呂の部

ろ 舟の具(和名)十一、今と同 四 艣唐韵云艣所以進船也(白文)廿四、十六 秋鴈櫓聲來(枕)十二、二 舟の道云々ろといふ物おして歌をいそぐうつさひさるいとをろーう云々 **からろ**

か の部に出たり **補** ろもゝをかーらにーさる歌(和泉式部集)「ろもおさで風にまろそるあまぶねのいづれのろさによらんとそらん(山家)「ーゐぢ行くかこみのともろこゝろせよまさうつもやきせとわさるおり

補 **ろ** 助辭(万)十六、廿五 「あらをらゐめこのおりをばおもむにろ年の八とせをまてどきまさぬ

ろさい 露臺(つれ〳〵)の抄 宦廳の内也(江次第)六、五 經呉竹臺東入仁壽殿露臺(枕)七、廿二 ろさいの前に植られさりけるぞうさんのからめきをろーき事おどの給ふ(つれ〳〵)廿三段 露臺朝餉何殿何門おどいいさゞとも聞ゆべー(公事根源)豐明節會舞姫のゐる云々節會のゐど露臺の亂舞也

ろなう　論ナクにて勿論ィ（うつゝ　初秋）上　ろなうことゝのそまひいかさん方にやゞてそけゞちなどいまそる事ありなんをさる心まうけせん（同くら　開）上、六十四　文給へ見給へんろなう私事侍りけんゝゝ（かけろふ日記）上、下　ろなう　印本、ろんなう　ろさやうにぞあらんとおゝもゝらるれど（同）同、廿　ろなうゐうゐもん物ぞとて皆酒のむものどもをえりてゐてささる（源さゝき）下、四　春宮に參り給ひてろなうかよひ給へる所あらんゝゝと目とゞめて見奉るに（同ゝしい木）廿五　これなんこの世のうれへにてのこり侍りつれゞろなうかの後の世のさまさげにもやゝと思ひ給ふるを（同さしひめ）卅六　ろなう物の用にそゞわりのそうゝなどもとまらゞとなん覺え侍りとて（同ゝけろふ）四　俄に人のうせ給ひつらん所ゝろなうささげゝく人ゝげく侍らんをと聞め

ろんなう　右に同（落くゞ）一　北方手まどひゝ給ふあこき心ろんなうぬひ物もてきなん物ぞとむねつぶるゝもゝるくうへの袴さちてこれ只今ぬせ給へ云々（同）一、少將落くゞ　といふ名を聞と　人の名にいゝにつけさるぞろんなうくゝたる人の名あらん（枕）九、四　げめさる所に　中宮心伊周のひさゝうる給ひつるを清のろんなうくゝと思ふらんと心得させ給へるにや云々

補　ろんなく　論ナ（更級日記）ろんなくもとの國にこそゝゆくらめ

ろんぎ　論議。こゝゝ僧の法問にいへりそべて相あらびて其道を論じ爭ふ也（源さゝき）廿九　法師もらのざえある限り召出て。（花鳥本）論議せさせて聞ゝめさせ給ふ（散木）下、五十四　奈良にありさる僧の論議ゝけるがいとゝもせぎと聞えけれゞ承源法師「論議をもこそひゝゐにぞゝさりける

ろんぎ　論ず　ろんぎる（源ゑ合）十一　此人々のとりゞゝにろんぎるを聞ゝめゝて　ひらげひ論ゞ（枕）九、三　そらでとおどの給ひかくるをあらげひろんゞおど聞めるゝ目もあやにあさまゝき迄あいおくれもてぞあらむや

ろうさう　緣　袗ろくさんをおざらめて（いせ物）四十一段　いへる也六位の袍也　いときよらおるろうさうのうへのきぬを見出てやるとて（枕）十、廿六　ろうさうおりとも雪にさにぬれおゞにくゝるまゞ昔の藏人ゝよるおど人のもとおどに只青色をきて雨にぬれてもおりおどゝけるとゝ今ゝ晝さに着ざめり只ろうさうをのこそ打ゝづきさめを補（顯季卿集）ある六位の二ゐの御許にうちの殿そまそゝけるゞ年頃にありにけれどめるされざりけるにろうさうをもとめ給ふとき、てこの六位ろうさうを奉るとて「雲の上もよそにのこきく身にゝあれゞみどりの袖もおゐゝゝゝいせん

ろうきよ　籠居（平家物）一、卅　大納言を辭ゝて籠居とぞ聞えゝ

ろうぎ　哢ず（源さゝき）の注　囀哢也　ろうぎる（かげろふ日記）下、上、二　司召廿五日に大納

言にあどの、〜れどヒゲ爲ハまーて所せきにこそあらめと思へバ御よろこびあど
おこそる人もかへりていろうぞる心ちーてめめうれーゝらばろうゞて（いせ物）九十
四段いとつらくおのゲ聞める事をバ今迄給ハねバこと己りと思へど猶人をバうらゝ
つべき物にあんありけるとてろうゞてよこてやれりける云々（源ゝもき）廿四、ゝら衣の所に
ああいとネーろうゞてゝるやうにも侍る哉とくるーゲり給ふ（同とこ夏）四れあゞか
ざーにてあぐさめんにあでふ事ゝあらんとろうゞ給ふやうあり かろめろうぜらる
（同さゝき）五十七つ、む所あうさていり物せらるらんハことにかろめろうぜらるゝ
にこそハと云々

ろく 祿。俗の拜領物 褒美の事也（古事）下三 給ニ多祿ヲ也（同）同十二 爾多祿と黙じ（禁秘抄）下卅
二必給祿（竹とり）千余日に力をつくーゝる事少ゝらぜるにろくいまゞ給む
らば（落くネ）一これハいつよりもよくぬハれよろくにきぬきせ奉らん（源きりつネ）
廿八おとゞ參り給ふべきめーあれバ參り給ふ御ろくの物上の命婦とりて給ふ白きお
ネうちきに御ぞひとくさり例の事あり（同）廿九ひさりの司の御馬藏人所の鷹そる
て給ハり給ふそむーのもとにこと上達めつらねてろくども品々に給ハり給ふ（同）
同とんゞきろくのからひつども（枕）二、四そさまじうぶやーおひうまのむおむけお
き物の部に

どの使にろくおどとらせぬ（同）四ノ廿三けふ此山作る人にハろく給むにべー雪山に參
らざらん人にハおゞらばとゞめんおどいへバ聞つけゝるハまどひ參るもあり
ろくろ 轆轤（和名）十五、九四聲字苑云轆轤鹿盧二音俗云六路圓轉木機也（うつネ 吹上）下十三ろく
ろにひきてさまーゞにいろどりて 補（うつネ 吹上）下六れおゞろくろびきのでき
ろくろがな（和名）十五、九鋌、漢語抄云鋌和名路久魯加奈 轆轤之裁刀也
ろくろー 轆轤師（うつネ 吹上）下卅二、此ふミの繪のろくろーどもゐてできどもおおゞ
さまをいへる詞に
ものーてひく
ろくろびきのつき ろくろにてひき製しゝる器をいふ（うつネ 吹上）下十九ぢんのをーき二十ぢんのろ
くろびきの御つきども（同）同廿四ゐゝんのろくろびきのつきども云々かむらけむー
まり御むー下りて云々
ろくだう 六道（地藏經）遊ニ化ヲ六道ニ拔ニ苦ヲ與ヘ樂ヲ注、所謂、地獄、畜生、餓鬼、人、天、修羅、是其六也（平家物）十二、四
道の沙汰の事の段 異國のげんさう三藏ハさとりの前に六道を見き云々
ろくゐそくせ 六位宿世（源をとめ）卅五めでさくとも物のむゞめの六位そくせよとつぶや
くもネの聞め。（狹衣）三の上にあおゝおしの受領そくせやとあるに同く六位ば
ゝりの人ゝ契りゝハせるハそくせのつさおきといふ意也
ろくゞ 六時（うつネ あてミや）十六源の少將ハ山にてもりにー日より穀そゝち壇たち

てこのゝ松の葉をもきて六時まゐく行ひて

ろくどのつとめ　六時の勤（源あゐし）廿一ひるよるの六時のつとめにゝづゐらのもちをのうへのねゞひをゞさる物にて　注、六時いへ晨朝、日中、日没、初夜、中夜、後夜也云々（同ものな）上、七十九、入道詞　六時のつとめもさゞ御事を心にゐけてもちをの上のねゞひをゞさ〜置てゐんねんど奉り〜

ろくぢやう　緑青（和名）十三ノ十一　本草云緑青一名碧青　俗音祿省

ろくゑのつかさ　六衛の司。左右の近衛、兵衛、衛門をいふ（竹とり）つかさ〜〜に仰せて勅使少將葛野のおゑくにといふ人をさ〜て六衛のつかさ合せて二千人の人を竹とりゞ家につかゝをも云々あけるひまもゐく守らを云々

補　ろくやをん　鹿野苑（拾遺員外）上「ろくやをんてらに朝日に雪きえて春の光りもまづやゝちびく（釋氏要覽）上、十九　在波羅奈國佛成道初轉法輪度橋陳女等五比丘處　けるゝ（義楚六帖）廿四七十　故ゝ　に見ゆ

○波の部

と　齒（和名）三ノ七　說文云齒口中折骨者也　和名波（源さゐき）廿九　御ものをこ〜くちて口のうちくろゝて（枕）三ノ十四　まげゐき物、齒もゐに女の梅くひてすゞをたる（同）十二ノ十二　齒をいみゞくやゝまどひて（盛衰記）九郎冠者ゞ軍將と〜てのゞると承り〜間緣ゐ

付て其やうを尋糸に、〜ゐれもて長う〜て身みゞゐく色白う〜て齒出たを

とを　齒並（古事記）中、五十五　波那美ゝ志比々斯那須　椎の如きをいふ也とぞ

とゞゝ（和名）三ノ五　斷波之々齒之肉也　今いふハグキ也

とかく（同）同齟　波加久　毀齒也

とゝかめを（同）三ノ十七　齲、釋名云齲蟲齧之齒缺朽也　俗ゐ虫クヒバといふ

とゐた　齒形（小大君）二十五　春宮にてゐをびのゆゝ〜げゐはゐもゞたのつに〜るを見て「くひ所見をゞうねゐるおいゐをびうゐたる人のくへるなるべ〜

とがため　**とがを**　**とぐろめ**　こをら別に出す

と　羽（和名）十八、十一　羽　和名波　鳥翅也（六帖）六下「朝ものゐゐ小夜うちふけてたつ鳴の羽こそゐるらめひとりぬるよゝ蟬のと（かけろふ日記）上、上十九　長歌　ゐゞ身むゐ〜くせをれたの今〜も人のうをからに（新勅）戀五　顯兼「おのをなく心ゐらゐやうつ蟬のもゐれく露ゐ身をくだくらむ

とね　別ゐ出を

とゞへ　**とゞひ**　**と風**　**と數**　**とむけ**　**と音**　**とふく**

と衣の類ひ別ゐ出を

と　葉（和名）廿ノ廿七　葉　和名波　万葉集黃葉紅葉讀皆毛美知波（枕）三ノ七　糸ぎもちの木云々　葉のいみゞうこまゐゐちひさに〜ゐをゐ〜きゐり（同）十一ノ廿三　葉ひろう見えて（月清）上「眞葛原玉まくかづやまさるらむもゐれく露ゐはたるとぶゐり補（後撰）夏、讀人をらず　「ゐをひつ、散ゐ〜花ぞれもをゆる夏ゝみどりに葉のゝをゐげれを

とのと　木葉

草ぞ　**草の**

[む] [松む] [松のむ] [さらむ] [青む] [枯む] [落む] [浮む] [立む] の類ひ其かゐの部を見るへし

[葉さけ] [むがへ] [む風] [む數] [むおと] [むむけ] [むでー] [むびろ] [むぞくゐ] ゐと次ゑ出む

[む] 刃を いふ（堀川）不會戀 後頼「あふことゝゝりさゐの刃をもあゆむこの人のこゝろのあやふまきつゝ [まろむ]（夫）卅三 知家「いまゝゝさきまろむゑとげる小ゞさゐの世ゑつゝりそれぬ身とぞゐりゑー

[む] てゑをむのはゐり常のむゝ抄むるゑ（源 タゝゐ）廿七 惟光の朝臣の來りつらんむと及ばゞ是ゝたゞかろく添たるゐり問ゝせ給へゞ（同）卅二 阿闍梨物せよといひやりつはゝ（同）卅 風やゝあら〜〜ーうふきたるゝまーてまつのひゞき木ぶのく聞えて [いせ物] 十五段 さはさゞゐきえびむ心を見てゝいかゞゝせんゝ（宇治）一ノ廿八 こを見よまことゑれゝーさはゝといへば（同）二ノ十九 例のぬー來て扃ゑ入ぬるむとつけまむーて

[む] 常のむゝ抄せむ是ゝ（万）八ノ卅八 どゑかゑふむゐり「秋たちていくゝりもあらねゞ（アラヌニナリ）此糸ぬる朝けの風ゝ袂すゞーも（古）秋上 友則「天の川淺瀬むら浪たどりつゝわゝりむて糸むあけぞーにけは（ハテヌニナリ）（源 まきむーら）廿五 道むがら涙おーのでひつゝまうで給へれゞ（タマヘルニナリ）對面ー給ふべくもあらゞ（枕）八ノ廿四 くらうなりぬれむ（ナリヌルニナリ）こゐさにゝ火もともさぬゑ大方雪の光り白う見えゝさはに

[むいろいろ] 誹諧歌 俳の字古くより誹と書來れゞ今改めんもさう。ーらなるべー隋書ゐどゑ誹諧とかけるも見ゆ（朝野群載）十三 評和歌策 匡房 誹諧古辭欲聞其訓（古今集）卷十九（後拾遺集）二十（千載集）十八（續千載集）七（新千載集）十八（新拾遺集）二十（新續古今集）十九 に入られゝり（八雲御抄）十一ノ十一 誹諧哥、是ゝいろなはをいふにろあらんまさーき樣ゐる人なー公任卿なども不知之而通俊何と心得たはにろ有けん入於後拾遺經信卿云入誹諧哥ふてこと事のゝろきも被知云々誠ゑ如公任經信不知程の事なれゞ末代の人非可定又千載集にもあり大方ゝさよめはべきやらんなどゝ推せらはれども其樣ゐることなー後拾遺千載集ゐ入ゝる哥ゝ物狂のことなれゞさやうの歌をいふゑやあらん但これをゐり顔ゑ定はゑゝあらゞ哥体可見古今也 以上（八雲）（幽齋聞書）下ノ廿六 八雲御抄云云 心のむいかい詞のむいろいといふこと侍とやらん幽齋おゐせきけられ〜古今の事なれゞおくをゞゐらぎたゞよのつねのをゞいくゝさびも狂歌といふべーていろいといふべからゞ

[むいらい] 拜禮（榮月のえん）五十七 こぞの御なやゝの折ゑ參り給へりーに宰相のをーへ聞え給ひー事を正月のついゝさちのむいらいゑ參りて申給ふなりけり八の宮のおろろにまーまををいへり（著聞）三十 仁平元年正月一日院の拜禮ありけり八條太政大臣七十二ゐてたち

給ひたりけゑ一たび拜〜てふさゝび拜〜給ひけり此事禮記に見えさはとゝや同二年にも又かくぞありける

もいぶ 拜舞（著聞）六、五　御あこめを給ハせけれバ左大臣かゝこまり悦び給ひてたちて舞給ひけり拜舞ハなかりけり

もいでん 拜殿（新古）神祇　熊野へまうで侍りゝに云々拜殿のなげゝにゝきつけゝ歌云々

もいてう 廢朝。御腦又ハ故障にて出御なく朝拜をうけ給ハぬをいふ（禁秘抄）下ノ十三　廢朝者諸司政如恆天子一人不臨朝政廢務者諸司不政一日或三日云々（續世繼）一ノ廿一　廢朝とて清涼殿のミそお

もいせん 陪膳（禁祕）上ノ廿二　朝餉御膳女房不候之時公卿或四位侍臣爲陪膳恆例也（源きりつゝ）十九　大床子のお物などハいとゝるゝにおゝ〜めしたれバもいせんまさふらふ限りハ心ぐるしき御けゝきを見奉りなげく

もいそ 拜す　**拜〜奉る**（うつゝ）國ゆつり）中七十五　宰相參りよろこび（枕）八、六　えせ物の所うは折の事、節、會の御陪膳の采女、中させ給ふさうぞくいとよく〜てもい〜奉り給ひて出給ひぬ（同）同、七十六　新中納言參り給ひて御せうそこ聞え給ひて御まへに出ておとゞもい〜奉り給ふ　**拜〜給ふ**（源きりつゝ）廿七　かうふり〜給ひて所ゝ所ゝまうで給ひて御ぞ奉りかへておりて拜〜給ふさまに　**拜〜けば**（新古）雜下　大江擧周初て殿上ゆるされて草深き庭ゝおりてもい〜けるを見て赤染衞門歌云々

もいす **もいて**

〜て（源ゑ合）十二　かんや紙ゝからのき綺をもい〜て（弄花）もい〜てハ張りゝる也（聞）うら打〜たる事也（私）むそび花ゝも糸をふのりにてぬり物に色々のなりゝ〜てつけ後ハ花ゝそはをもい〜物といふ也以上（眠江入楚）

もいはゝ 掃墨（和名）十五、十二　功程式云掃墨一斗合酒二升膠二兩和名波伊須美

補　**もいさゝ** 鵜（吉野拾遺）もい鷹一もと奉らを〜を云々山のゝゝへそれゆくを

補　**もろ〜〜** もるあり〜（万）五ノ廿三　「もろ〜〜ハおもはゆるゝもおらくものちへハへゞてはつく〜のくゝハ（同）廿五　「もろ〜〜ゝおもゝゆるゝもおかれどもけ〜ゝて、ろをあげもハなくゝ（同）廿七　「よろづたびかへり見〜つゝもろ〜〜ゝゝもろ〜〜ゝくれバ（同）十二廿六　「なゐもげゝこゝに出るふゑの遥々ゝゝもろれきぬれどゝそれかねつも

記傳三十五ノ卅八丁にくしき說あり見るへし

もい 母（和名）二ノ十二　母波々（万）十一廿一　「櫻麻のをふの下草露〜あらバあら〜ていゆけ母ハ〜るとも（新勅戀五）かんおやとあり（いせ物）十段　母なん藤原ありけは（源ゝしひめ）四十　母ゝ侍り〜人ハ（同たま葛）四　母の御もとへいくゝと問ひ給ふゝつけて　**母君**（同あゝし）四十二

母ぎともなぐさめ申びて母宮（母君の皇女ある をいふ）（狹）三中、廿八 いと心もとなーと母宮おぞーされも母上（母北方おどいふごとくうへとい殿わおらべて尊みて いふ詞おり今の俗平人の事にもいふい古とたがへり）（源 みのり）十九 むゝーー大将の御母上母御息所（源 ゆうな）下、百七 母御やも所ーも母北方（同 ゆうな）下 百八 母北の方

むゝーろ（母代。母わなりてうしろ みする人をいふ）（狹）三上 廿一 母代いと面白うめでたう思ふ 廿四 母代ゲならゝーー聞えさはいゝひでとおめりと見ゆるわ 卅八 近うふーたは母代れどろきあひてふと聞つけて（宇治拾）五 七 二條の大宮と申けはゝ白川院の宮鳥羽院の御母代わおもーまーける 補（平家物語）一 高くらの院御ざいゐのとき御もゝーろとておゆん三こうのせんーをかうふり

むゝげさ（母方。今と 同）（源 紅葉の賀）九 御ぶく母方ゝ三月こそゝとてつでもりわゝぬゲせ奉り給ふを（同 うす雲）四 母方ららこそ御門の御子もきもゞーまおゝをめれ（狹）四下四 四十二 さはゝ御母方などよつけても物たのもーく思ひうーろこ奉り給ふべき人もなくて母のをぢ（濱松）三 母方の御をぢさ（和名）二ノ十二 外祖父母方乃於保知。同書母黨の族今一々抄せば例ーてーるべー

むゝ（幅）

むゝら（和名）廿、二十 本草云櫻桃一名朱櫻 和名波々加（古事）上十九 内抜天香山之眞男鹿之肩抜而取天香山之天婆々迦而令占麻迦那波而（延喜臨時祭式）十三 凡年中御料婆波加木皮者仰大和國有封令採進之（堀川）鹿匡房「かこ山のむゝらゞ下にうらとけて肩ぬく鹿ゝ妻こひなせそ とおりとぞ

むゞらる（憚）（万）十二、廿五 「赤駒のいゆき婆々箇屢まくずゝらなさのつてでとたゞまーよけん 補（万）三 白雲母伊去波伐加利 むゞらりて（万）三ノ卅三 行憚而 むゞらりもぢ（源むゝきゝ）十八 むゞらりもぢて憚りれぢ（同 東や）三がうけのあたりおそろーく煩ゝーき物さ憚りれぢ憚らせ（同 ゆうな 紫）十七 れぢされん所をもむゞららせ打出侍りぬる（濱松）四 人のそーりもとがも憚らせ憚らせ給ゝぎ（源 きり壺）初 人のそーりもえむゞららせ給ゝぎ（同）十九 そこらのそーりうらみもむゞからせ給ゝぎ

むゞらり 体の詞 憚わ（源 あふひ）十 齋宮の云々 榊のむゞらりさ事つけて心やをく も對面ーー給ゝぎ（同 東や）十 中々む孫いさきめをや見んのむゞらりさ思ひ定むる事もなくておん 補 憚の（後拾）戀二 よみ人しらす「おはらめや身こそ人めをむゞらりの關さ涙ゝとまらざりけり憚どを（濱松）二 御憚りどもふかゝりけはさ憚おそく（源 きりつぼ）十二 松のおもむん事さよむづらーう思給へ侍れば百敷さめきらひ侍らん事ゝまーて

いとむゞりおゐくなん（同すま）六よりなれ心ゐまゝせてつれなく過し侍らん
もいと憚おゐく（同あかし）十いともむゞりおゐく侍れと憚ある（同さゝあ）下九十九
古めゝしき御身さはよて立ならび顔ならんも憚ある心ちしけり憚なき（同すゝむし）
四むゞりなきぬのおとなひ人のけもひしづめてなんよゝるべき憚もなく（同
わゝあ）下、八十三、女三ゐひゝと憚りもなく聞ゆ
ひて小侍從れ詞云々
むゞらいしう（濱松）三御おもてふせゐもあるべきゝなともゞからいしうれゐせ
ど云々

むゞらは 是い俗語のハバル、ハバッタイなど いへるごとくひろごる意あり（散木）中ノ卅一佛の御ゐさいひろく長くて大そらよなんむゞらるといふ事をよめは云々（同）三十二阿彌陀佛の御身い世中にみちてはかりうべからぬといへる事をよめる「こゞの身もあまのこそらにもゞらりてよもせゞしとや思ひしるらん

むゝそ 柞（和名）廿ノ二十柞音祚一音昨和名由之漢語抄云波々曾木名堪作梳也（古）秋下是則「さゐ山のむゝその色いうそけきど秋いふゝくもありよけるかな（同）同「さゐ山のむゝその紅葉ちりぬべこよはさへ見よとてらは月影むゝそ葉（万）十九ノ十四長歌ちゝの實の父のこことむゝそ葉の母のこことむゝらいら柞原（万）九ノ十六（六帖）六下（新古）雜中宇合「山しゐ（新古）（六）山しろ の岩田のをの（六）森の柞原見つゝや君ゞ山路（六）獨こゆらん

むゞむ 沮（禮記）儒行刼之以衆沮之以兵（史記）孔子世家請先嘗沮之沮之而不可云々

むゝくそ 黒子、俗ニいふホクロの事也（和名）三ノ廿三漢書云黒子波々久曾（宇治拾）六ノ六腰のゐどよむゝくそといふ物のあとぞさふらひし

むゝこぐさ 母子草（和名）廿ノ十本草疏云菴蘆子和名波々古 契冲云今本草を考見はよ菴蘆子ゐいあらゆ鼠麴といふ草ゐ其葉鼠の耳よ似て其花麴の如くなれゞなり又云茎も葉も霜の置たらんやうに白きゞ底の青くて花い黄よて末でとゐつゆめはやうよある草ゐり俗のゴギャウといへる草ゐりとぞ（文德實錄）一ノ十六此間田野有草俗名母子卅二月始生茎葉白脆毎屬三月三日婦女採之蒸擣以爲餻傳爲歲事（實方集）小一條にある人の娘を忍びてかゝらふよ女おや聞つけていこどう腹たちてつこゐどすはときく頃三日の夕ゝゝ北の方もちひ參れとあれゞ「こゝの夜のもちひいくもとうかりけりきけゞよどのよむゝこつこれゐ（後拾）えい。わづらいし補むゝこもちひ母子草餅（和泉式部）石藏より野老おこせたはてゞこよ草もちひいきて奉るとて「むなのさと心もゝらゐ春の野よいろ〳〵つめはむゝこもちひそ

むゝき 箒（かけろふ日記）下中三庭むくとてむゝきをもちて木のゝさよたてはゐどに

（和名）十六八 篠一名篁 波々木 （枕）七ノ十九 とのもりづゝさの官人ども手でとにもゝきとりを なでならす（同）九ノ廿四 人の家よつきゞゝき物、もゝきのあさらゝれ 玉もゝき（万）廿ノ五十八 「むつ春のむつ糸のけふの玉もゝき手にとはからにゆらぐ玉の緒

むゞき 脛巾（和名）十四十七 行旅具、行纏、唐式云行纏本朝式云脛中 俗云波々岐。今の脚絆也今も國わゝよりて もゞきと いへり（延喜式）五ノ十 脛巾八十八條 脛纏八十條 共ハハキマキと點したり 補（著聞）一ノ十八 大臣の身よてさらぐつもゞきをちやくゝて長途をあゆミまゐりたはありがゝき事也と云々 大臣の身よて藁沓もゞきゝて参り

もゝきぼゝ 彗星（和名）一二 彗星其形如箒 八々木。音遂又保志 音歳

もゝきゞ 箒木（袖中抄）顕昭云 もゝきゞとハ信濃國よその原ふせ屋といふ所ハ森ありそれ森よて見れば箒よ似たる木の末のあるを立よりて見をぼろの木も見えぞとなん申傳へゝは云々（六帖）五上 くれどあたそ 「その原やふせやに生ふはもゝきゞのありとてゆけどあもぬ君かな（源ゝゝき、）四十九 「もゝきゞの心もゝらでその原の道よあやなくまどひぬるゝな（夫）廿九 俊頼 「もゝきゞハ思ふふせやとれもへバやちゝづくきゝよかくれゆくらん

むに 埴（和名）一十一 埴釋名云土黄而細密曰埴 常職反、和名波爾 むまつち（神代紀）上卅九 遂以

埴土作舟

むにふ 埴生。右に同（八雲）三上 土の所よ出ゝ給へり（古事記）下ノ十一 河内國埴生阪を波邇賦坂とかけり（万）一廿七 「草枕旅ゆく君とゝらませバ岸の埴生ハ匂ハさまゝをいにしへかゝるものハて衣をすりい（夫）廿六 般富門院大輔 「うら寒くゐぐはゝよもの旅衣岸のむまろぶりといへり

ふにいたく匂ひぬ（鎌倉右大臣集）下二 「旅のそらなれぬはにふのよはの床さびゝきまでハもは時雨ゝな 是い床とのゝよめり猶もよふの小屋の意なり

むにふのこや 埴生の小屋（八雲）三上 むよふのあやゝき家とあり。さび ゝくいやゝき家をいへり（万）十一 廿一 「をちゝたの赤土小屋よこさめふり床さへぬれぬ身よそへゝさぎも（永久）俊頼 「君こばとむふれこやの床の上ハあさてこぶそまひきてこそをれ（新六帖）五 ロゝたむ光俊 「ゝもをちのむよふの小屋ハかりまくら夢よあゝてもひとよゝたはあ 補（續古）夏、平政村 「道のべれむよふのこやれそどあきハあまをてかゝは夕ゞその花

むにさふ 匝。今音便よ云ゝゞひて次よ むんざふ と出ゝつ

むへ 蠅（和名）十九、廿三 蠅 波閉 胆 波閉乃古。ハヒといへるハ俗なり（枕）三ノ十三 むへてそにくき物の内ハいれつべれれ云々 万の物よる顔などよぬれたは足ゝてゝるゝるよ

むへ 延 むへる むへて など むふ の所よ出す

もへとらひ　白拂（和名）十三、十四。僧坊具　白拂千手經云若爲除身上惡障當手白拂和名波閉。蠅とらひあり波良飛

もへとり　蠅虎。今ハヒトリグモといへり（和名）十九、廿一　蠅虎波倍度里　此虫似蜘蛛恆捕蠅爲粮者也

もべり　侍　ありあはを物語りをは詞よ敬〜て侍り侍るといへり故よ俗語のマスマスルふて侍りきハマシタ侍らんハマセウ也又ゴザリマス、ヲリマス、など皆同例也

もべてもべるハ　物語する詞又文の詞よのミよて草子の地よミえさるいいと〳〵少〜歌合判の詞ハ物語そるとれあもドもをバあり

べりともむんべりともいへり（枕）五、十一　おのれがもとふめでたきん琴侍りそれよかへさせ給へ

べく侍り

べく侍らん（源手習）四十八　僧都詞　こよひかの宮よ參るべく侍りあれよりや御修法も下まはべく侍らん參ルデゴザル、始マルデゴザラウ也

もべり〜（源橋姫）四十　母ふ侍り〜人ハ補もべ〜（同若菜）下、三百　おもきやまひをあひたをけてあんまゐりて

もべ〜侍き（枕）四廿九、雪山の所　木もりが申つるハきのふいとくらうあるまで雪が侍きゴザリマシタ也

侍ける（源さうき）三十七　霞も人のとり昔も侍りけは事ふやおど聞え給ふゴザッタ也

侍ぬ（同とゝきゝ）八　かとがかこハ打置侍りぬ打オキマス也

侍て（同やとりき）七十三、かをるのふみの詞

山里ふ物〜侍てマシテ也

侍あバ

侍なん（同うつせミ）六　あゐさふかへり侍りなバたバり侍りなんマシタナラバマセウなり

侍つれども

もべらざりつれバ

もべるを（枕）二、廿四、女車に消息した

る使の詞　ひさ〜うたちて侍りつれどもレドモ也　ともかくも侍らざりつれバとのゴザリマセバ也　さバ參りあんとて歸り侍るをよびてと申をルヲ也　侍る

もべりけれ（源若菜）上、廿六　身よとりてハことよもあるまゞく思給へさち侍る折々あはを更よいと忍びがさき事おそりぬべきさざよてそ侍りげれマスル。エザリマスレ也。

もべれど（同タゝり）六　此五六日ど、よ侍れどチリマスレドあり

もべらん（同はゝきゝ）五　誰りハすりされより侍らん

もべらぬ（同桐つゝ）十　ゑも見え侍らぬよマセヌ也

もべらば（同）十六、文の詞　ともかゝてきハおき所も侍らぬゴザリセズ也　ろやそりはべきよりなん生テチラズ也

世よもべる

世よもべらん（かゝろふ日記）中、中十九　もべて今まで世よ侍る身のおてさりあをバ（同タゝゝ）四十六　いりでり世よ侍らんとそらん（同をとめ）廿二　世よ侍らん限りハ生テチル、生テアランの意あり

もべり　是ハ敬して人の上よいへり

侍なん（同とゝきゝ）廿四　今さりとも七とせあはりのゝどふおぼ〜知り侍りなんオホシ召シルデゴザリマセウ也

侍つる（狹）三中廿　媒の詞　御かへりでと見ぎハ世よもあらじおど侍つるを仰ガゴザリマシタルヲの意あり。歌の詞書などよも人のいひうけし事を云々とあれバおどいへるよ同意也

侍て（狹）三上廿四。あそり井の姫君の女房の詞か、は人を大將の事也の此ことりふ時々よてもの姫君待つけ侍りておハせバいりよめでたからまー

もべらば（源とーひめ）廿七、辨の詞　のこりをとおゞーめ

を御心侍らば　もべらなん（同はし姫）同さらぬたゞかゝはふるもの世ゝ侍りとりとばのりおろ〜め〜侍らおんゴヅンジ侍りなんと異ゝて願の意のなん也ちの賀）九仰でとも侍らんこそうれ〜くおど云々。ゴザラウコソ也（同東屋）十一かの御心ざ〜ゝたゞ一所の御ゆる〜侍らんをねゞひれゞ〜て

もべり　是ゝ下ざまの上ゝいへり　もべる（竹とり）御門の御詞汝ゞ持て侍るかくや姫奉れナルの意帝意ゝり。御身の尊きゝむゝへ（枕）三廿二、名對。藏人御前ゝ向ひてうゝろざまゝ誰々ゞ侍ると滝口てかくの給ふ也面の所ゝ

問ふゑどこそをゝ〜けれ是ゝ伺候の意のさふらふゝ同く主上ゝむゝへていへるゝり

もべり　撰集ゝ公ゝ奉る物ゝれゞゝるとゝくべき（古今）春上　かくさだゝゝゝやどりもし書の詞を侍ると敬してかける也とぞ

ゝゝあはといひ出〜侍りけれゞ（拾）雜下大納言朝光ゞ兵衛佐ゝ侍りれる時此拾遺集の撰者花山法皇とも公任卿とも説々。御撰ゝもゝれさき〜〜の御製も加へ給へゞそれ宣命未決のよし（八雲）ゝ見ゆ。ゝむゝへてもべて猶侍りとかゝせ給ふなるべし補（續紀）

秦奉侍爾（同）見聞喜侍止（三代實錄）貞觀十二年詔ゝ起居失便天ヘベリ波部利

もべるめり　たゞ侍るゝめり（枕）十ノ廿六　されど我よりさきゝとこそ思ひて侍るめりつをそへゝる也

れ侍めれ　侍める　例して知べし

もべめり　もべるのるをもぶきたるゝり。あるめりを（源うを雲）卅三　もろこ〜ゝゝ春あめりゝるめりをゝめりのたぐひなゝ多し

の花の錦ゝをく物なゝといひもべめり（同玄ひゝもと）卅六　ゝのゝゝの給ふさはもも

べめり　もべめは（同野分）六　かうさとぐ〜げゝもべめるを　もんべめる（かけろふ日記）中下　いゝなはゝゝあらんまうでゞたくのこおもひてもんべめる　もべめれ（同）下　ふぢやうゝゝは事どももべめれゞ（同ゝゝゝ）上九十一　いとあや〜きゞんゞとゝいふやうゝるあとゝもべめれど

もべらざめり　是もべらざるめりのるをもぶきさる也（竹とり）たゞことゝも侍らざめり

もべりたうぶ　人の上ゝいふ侍りゝてたうぶも（源をとめ）八　おゞ〜かいもとあるゞもたまふにおゞく敬語なり

あはさひざうゝ侍りたうぶ　もべりたうびゝ（同とこ夏）廿一　妙法寺の別當大とこのうぶやゝ侍りけるあえ物とゝんなげき侍りたうびゝ　もべりたうびて（同かげろふ）卅二

こづからあひ侍りたうびて　もべりたはふ（同こ〜ひめ）十一　今とおりてゝ心ぐる〜き（イ本）（岷江本）

女子どもの御うへをえ思ひもてぬとなんゝげき侍りたはふと奏も共ゝたぶ

もべりたうぶ　此たうぶゝおのれが上ゝそへていへる給ふる梅の花ゝさ）廿三給へて給へんゝどに同但給ふといへる例なし（うつゞ

桂川ゝとりゝ興あはゝ所をもて侍りたうぶそこゝなん花見給へんとて日頃侍りたうぶゝり已が上ゝいふゝ

いと〜少くや

おもひもべる　思侍（消息文例）に（ゝゝゝ）と（榮花）とをひきていとま（榮玉村菊）四十四　日頃やゝからぬ事と思ひ侍れどたゞまらせ聞えて見んと思ひ侍るゝ云々　思ひ侍らん（

（源うつせみ）九人の思ひ侍らん事のむづかしきまに云々 思ひ侍りぬる（同をとめ）十八世い思ひの外あは物と思ひ侍りぬは 思ひてむんべるめる（かけろふ日記）中ノ上五いとさびしーと思ひてもんべるめは此たぐひ前まも二つまで出ーつ 思ひ聞え侍る（源とうな）上八十、入道文の詞 げ君をたのむ事まに思ひ聞え侍りしーつ 思給へ侍る（同桐壺）十二 松のおもむん事だまもづかーう思給へ侍れと 思う給へられ侍る（同）十四 かへりていつらくおんかーて き御心さーを思う給へられ侍る（同をま）十、九文の詞 又参り侍らぎおりぬるおんあはさのうれへまをまさりて思う給へられ侍る

さふらひむべり（同玉かつら）廿三 今の大殿おおんさふらひ侍れば（オッカヘ申テチリマスレバの意おり伺候イタシテ 是らのおる詞）廿九 宮の御かたりわ今迄さふらひ侍りつは（チリマシタ也。とくさふらふい給仕し伺候 ○されど下りての世にい添へていふ侍るの所まさふらふといふめするをいへる詞也 ○り古き書まもむべるとさふらふのまじれるあり是い寫ー誤れる物ゥ但もとよりかよ（枕）十二ノ七げす男からいめを見さふらひつる誰まかうれへむてかけるまや の女官まいふ詞 申さふらいんとておんとなきぬむりのけーきわていふ何事ぞと問へばあのらさはまま物へまりたりーまわきたなく侍る所のやけ侍りわーかば日でろいがうなのやうまに人の家まに尻をさーに入てなんさふらふ馬づかさのえまくさつえて侍りける家よりおん出まうで來て侍るなりたゝ垣をへたて、侍れば夜どのまに紛て侍りけるさらいべもわと〜やけ侍りぬべくなんいさゝか物もとうで侍らばおどいひを る此余さふらふと。すべていへる猶あり。つれの 侍る も動かーいふ詞皆同例あり 侍らまわー 侍るおり などさまへり一々まに抄せぎおーて去るべー

むべる 是い草紙の地まい（源せきや）七 あいおのさかーらおどぞ侍めは（同をかあ）上ノ六 いとうるさくてこちさわ御なからひの事どもいえぞかぞへあへ侍らぬや（枕）十八 八ノ十五 月でろいつーかと思ひ侍りーだわさが心ながらをきぐーとおわえーま（榮つわゝを花）廿三 をとがまーうぞ見えさせたまひけるとぞ侍りー（同駒くらへ）十五 くらけまは見え紛どいゝどうせさせ給へりとぞ聞侍りー むんべる（同御賀）終 いゝどくあれまとこそ聞むんべりーが（同御着裳）終 これを與ドてやませ給ひまけりとぞかさりむんべりー

むと 鳩（和名）十八ノ五 鳩 夜万八止 此鳥種類甚多鳩其總名也、鴿 以倍八止（新六帖）二信實「おけりつゝ木ぶかき山の夕ぐきいこもを聲まぞ鳩いおきける 山鳩（夫）廿七 まを見わ

補 むとまかむは 鳩ま代る也（散木）二「日をへつゝかりくらーてもかへはかおむとまかはまをーー人もある世わ。釋迦佛昔爲尸毘大王代鴿懸秤給事也

むとり 織（應神紀）十三 三十七年春二月戊午朔遣阿知使主都加使主於吳令求縫工女

云々 吳王於是與二工女兄媛弟媛吳織穴織四婦女一(和名)六 伊勢國郷名服部 八止利と見ゆ ハタオリ(夫)卅三 爲兼 「人の國わおるてふもとりつさへてもあやーやいりまこゝわーもきは

もとさらふ (ていゝと)打笑ふ聲也(宇治拾)五ノ十六 此頃の氷魚ゝ目鼻よりふり候あるぞといひたるけきゝ人皆もと笑ひけり 補(同)一一どゐもつとさらひけるとり

もとのつゑ 鳩の杖(夫)廿七衣笠内大臣 「男山れいのさりゆくひとゝこゑもとの杖わもかゝるぬるりか(同)卅四家長 「八幡山神やきりけん鳩の杖老てさりゆく道のためとて

鳩てふ杖 (同)卅二慈鎮 いりまーて鳩てふ杖わかゝはまで君まつりへて此世くらさん

もとふく 鳩吹。頃ゝ鳩の聲のやうま手を合せて吹あらそ(れうーの鹿まつまも人をよばふまも鹿ありと人まこらそるまも秋の猶さまゞ〜の説ども見えたりつゐて見るへし)(奥儀抄)六又(袖中抄)十五わ(好忠)九月上 「まおーさー鳩ふく秋の山人ゝおのゞをみりをこらせやゝそは

鳩ふく聲 (夫)十隆房 「けふよりや鳩ふく聲ゝ聞ゆらんあさけの風も秋をつゞかり

鳩ふく秋 (堀川)立秋顯季 「朝まだき袂まで風のそゞーきゝ鳩ふく秋まで成やーぬらん(千)戀四仲實 「まふーさをこづそのの身まもたへりゐて鳩ふく秋の聲たてつかり(拾玉)一、廿 「五月雨のふりーむそらも哀あり鳩ふく秋の風あらねども

もち 蜂(和名)十九ノ廿二 蜂蠭波知 蜜蜂美知波知(枕)八ノ十三 蜂の巣の大きまてつき集りたるあど

いとおそろーき 補(拾愚)上 「うきて世をふはやの軒まそむ蜂のさゞゞまあれぬいとふものから

もち 鉢(和名)十六ノ二 四聲字苑云鉢今案無二和名一以レ音爲レ名 學二佛道者食器也胡人謂二之盂一也(源若菜)上廿九 院の御はへませんかうのかけもんま御もちなど昔まかもりて參るを

もひの鉢 (同)下百二 かたのでとくあんいもひの御もち參るべきを御賀あどいへもこと

もぢ 恥。体の詞也 **もづづる** 別まに出も **もぢ皮** **もぢて** **もぢらふ** **もぢーむ** **もぢりいを** 此たぐひ

はづ の所み附も **もづゞーーき** **もづゞーむ** あどおのゝ(源もみちの賀)廿別まに出も 三今更ある身のもぢまあんとてあくさまいといとゞ

一生の恥 (竹とり)かくて此御子一生の恥これまは過るもあらゞ

もぢまのぞむ **のぞまぬさき** (源もま)六 てきより大きあは恥まれぞまぬさきまは世をのゞきなんと思う給へたちぬるあと云々云々

もぢわをませぬ 恥まは死ぬ。死ヌベキホトノ恥ナルニシニオクレタルをいふ てりうきをもらぬさまて恥にをませぬ身をながらへん

もぢを見は 恥辱ナルニアフをいふ **もぢ見は** (うはを不 國ゆづり)下ノ十八 さゞさいもひあく恥見は

べきそくせのありけをば【恥を見ば】（同くら開）下、四十三　それのミかゝは恥を見ばこそあらめ【見るなる恥】（同祭の使）卅三「夏衣ぞげぬぎ捨てるけふよりハ見はあるる恥もうすくありなん【もぢ見そる】恥チアタフル意也（同さゝこそ）十一我ゝ恥見そは事いゝでゝこれがむくいせんと思ひありて【恥を見せて】（同さゝの院）六十五名をたてさせて恥を見せてそて給ひあもいのゞせん（竹とり）さゞ尻をかきいでゝこゝらのおゐやけ人ゝ見せて恥を見せん

【もぢをそつ】俗ノ恥モ人目モ打ステ、といへる意あり【もぢをそつる】（同）かの鉢をそて、又いひけは（よりイ）ゝぞおもあき事をゞ恥をそつるといいひけは【はぢをそて、】（うはゐたゝこそ）

三　恥をそて、いひ出んとおゞーて（同きくのえん）下ノ卅二恥をそて名をかへり見ぞ出たちて時の上達めゝ見えゝらをゝゝゝゝこそ云々

補【もぢをさらを】恥ヲ肆（著聞）十二、廿三　つひゐ定めてからめ出されてもぢをさらゝかあゝきめをこそ見候ハんぞれ

【もぢかくは】恥のかくれて人ゝ見られぬあり【恥かくをぬ】（うはゐ不國ゆつり）下、五十七後ハとまを

かくまれ知るとたゝの給ハゞ恥ゐくれぬべゝ【恥ハかくをぬ】（同吹上）下、九

寶をつくゝていたハる所ゝもる給ハでそゞかく貧き所ゝおハそれば恥ハかくをぬ

おどいふ【もぢかくる】恥て隱る、意なるハ【もづ】の所ゝ出す

【もぢかくを】恥をつくろひ（落くを）一いゝふゝてかく恥かくを事ハゝつるぞ（枕）五、七

清の哥を卑下るところに人のえもいひつゞけぞおりぬるこそ中々恥かくを心ちゝてよりゝゝ

ゞ【恥をかくゝ】（源きりつを）十三身ゝあまる迄の御心ざゝの万ゐかたゝけおきに人げ

おゐ恥をかくゝは、

【もちがまゝ】ゞまゝいそべて俗のオツレガマシ禮ガマシなといへるガマシに同【もぢがまゝき】（同わふひ）三　人のため恥ゞまゝき事なくいづれをもあだらゐゐもておゝて女のうらをおおひそとの給ハそるゝ

【もぢなく】恥ズ、ハヂラハズの意なり（同をとめ）八かたくあゝき姿をもぢなく

【もぢなく】是ハ、ハズカシカラズの意也（同名合）十八たゞ筆のゝさり人の心ゝつくりたてられて今のあさましゝあるも昔のあとゐ恥なくゝされハ、ゝく【恥なき】（榮ゝとてぬ夢）廿恥なきゐ

との女房十人ゝらた二人下づゝへ二人ゝてあるべきゐどゝめやそくおさて、

【もぢおる】恥を知るなり（狹）三上四十いづちも〳〵もやうせ給へ恥ゝを給ハぬゝと顔ゝあて、

つまもゝきをおりくるさはいとおどろ〳〵ゝげなるに

【もち】撥（和名）四、十切韻云捩音麗俗用撥字琵琶撥名也云々音如磨遲二音（狹）二下卅六びとひきやめたまふ所ゝ

もちついさゝ給へるを（附）（和名）四八、槌一名抱字亦作桴俗云豆ツ美乃波ハ知ヂ　ぢち音（源紅ばい）八ぢうさをそともちおとのさまかもりてあまめりゝう聞えたはあん（同かけろふ）卅六おあゝ琴をかきならいつまおともぢち音も人ゝいをさり云々

もちさいをうさう　八大龍王（義楚六帖）廿三、廿五法花經云、一難陀云々二跋難陀云々三婆伽羅云々四和修吉云々五德叉迦云々六阿那婆達云々七摩那斯云々八瀘鉢羅云々此八龍王或在大海或住虛空等（鎌倉右大臣）下「時よりをぐれば民のおけきなり八大龍王雨やめ給へ

もちふく　。契沖云東坡云搏虎者不レ能レ不レ吹レ蜂うそをふきて蜂をよせつけぬやうよするなり。案をるよ今の人のつばきばきをるやうよいおむ時よをるこゆ事とき（源ゆうな）下五十八、小侍從ゞ柏木　何ゝよ參りつらんともちふく　もちふき（同松風）四　ひげがちよつあゝにくき顔を鼻など打ありめつゝもちふきいへも

もちゝのまゆ　八字の眉（夫）一爲家「年のあくは神の玉の戸いはあひて八字のをもの眉ぞひらくは

もちを　蓮。又もを別よ出をともいへり（長秋詠藻）下「この道のさとりゞさきを思ふよもちをひらけばまづ尋見よ　花蓮別ニ出ス　蓮の花（玉）釋教資隆「草の庵の露きえぬとや人ゝ見は蓮の花よやどりぬる身を　蓮の露（源ゆうな）下　池の蓮（後拾）雜五重之　蓮の池（山家）

下「松山の涙ゝ海よふりくありてもちをの池よいれよとぞ思ふ　補蜂房の意（記傳）四十一卅九オよ説あり

もちをを　蓮葉（古）夏遍昭「もちゝをのゝあでりよをまぬ心もて何のゝ露を玉とあざむく

もちをのもひ　蠻（和名）廿ノ十五爾雅云其本蠻波知須乃波比郭璞注云莖下白蒻在泥中者也。稱ゝ古本ゝ波知須乃稱とあり（奥儀抄）三蓮ゝゝもひといふ物あり人のくふ物也。契沖云（延喜式）卅九内膳式云波斐四把云々もふ物あれゞ用をもて体よ名づけたるなり（後撰）雜一もちをのもひをとりて「蓮をのもひよそ人ゝ思ふらんよよゝこひぢの中よおひつゝ

もちをのうへ　蓮の上（阿彌陀經）極樂國土有七寶池八功德水滿其中云々池中蓮花大如車輪（拾）哀傷空也上人「ひとたびもあむあみだぶといふ人のもちをのうへゝのゞらぬゝあゝ（同）同實方「けふよりゝ露の命もをゝからゞもちをの上の玉と契れば（長秋詠藻）下「ゝゝゞひれさゝ花のもとゝてをゝりけをもちをのうへもたゞゝさらあん（源ゆうな）十心をのりゝもちをの上よ思ひのゞをゝりなき池ゝもををぬべきを

もちをのうてな　蓮の臺。玉のうてあなどいへる居室の（夫）卅四般富門院大輔「曉のもちをのうてゝいろゝゝよををはさはゝり糸たけの聲

もちをれのを　蓮の法（夫）卅二。喜多院入道二品のをを「いさぎよくもちをれのりをうつゝてぞも

とも硯の水をそへけは 法花經の事あるべし

補 むちぢやう 八丈（宇治拾）八丈うはものあとあまたよび入てきぬおろくとりいで、えりゝへさせは、（同）三八丈一匹人ゝかりて云々 さゝくいひて八丈をばうらで（玉勝間）十一、卅八丁説アリ

もり 針（和名）十四ノ九 鍼 波利 縫衣具也字亦作針（万）十二、十五 針ハあれど妹ゝなければ云々（枕）五ノ十三 糸さゝ物、とみのものぬふまぬひもてつと思ひてもりをひきぬきたれをはやう尻をむすびさりはり又ゝへさはまぬひたるもいとねたゝ

もりめ 針目（万）四ノ十七 「さゞせこゞきせは衣の針目おちは（枕）四ノ十六 誰も〳〵見つれどいとかくぬひさは糸針目までやハ見とゞゝつる

もりのこゝ 針の耳 今いふ針のメド（うはゞ としゝけ）いとはゝひよきてつくりの針の耳いとあきらゝあるゐゝあの、もつりをいとよゝゞとまをげて

もりのさき 針の先（落くゞ）二袋ぬひもて、云々 硯筆もあありければあるまゝまた りのさゝゝてたゞかくなん 歌云々

もりもこ 針箱（散木）下、四十、隱題 はりはこのふた 「はりハこのふさつの袖まさゝにれどひとつも見えはおちまけはこのあ

もりづゝ 針管（和名）十四ノ九 裁縫具 魏武疏云針管一枚 和名波利 都々（禮記）内則 婦事舅姑云々 右佩ニ歲管線纊一

もりささ 張綿 あやの張綿（落くゞ）一 北方よゝと思ひておのゞ着さはあやのもりわさのおへたはをきせ給へは風ハさゞもやまおはまゝふいゝませまゝと思ふまを こゝうれゝと思ふぞこゝちのくゞ過さはまやかいねりの張綿（同）同 そひふゝさは人あり君あるべゝ白きゝぬのおへさると見ゆるをきてかいねりのむをさゝあるべゝ腰より下ま引ゝけてそもこてあれは顔ハ見えゝ おそん色の張綿（同）同 几帳奉はとておをん色のもりわさ迄おこせさり

もりたはゝひ 張魂（盛衰）卅四 木曾ハ張魂なは男まていひさちぬる事をひるゞへらぬ者あり

もりむゝろ 張筵（枕）六廿二 さひゝゞまを見ゆる物、雨ふらぬ日もりむゝろゝたは車ふは日もりむゝろせぬも（抄）雨おそひ服車などに筵をもる事 西宮記にあり その さゞひなり

もりのかゞみ 頗利の鏡（十王經）於中殿裏有ニ大鏡臺懸ニ光明王鏡名ニ諍頗梨鏡一（夫）卅二 仲正 「てらをあるもりの鏡まに罪ふのく忍ぶは戀やかくれなはらん

補 もりぶくろ 針袋（万）十八 卅五 「もりぶくろとりあけまへおきかへさへハおのと

もおのやうらもつきさり（同）「もりぶくろおひつゞけあゞらさとでとゐてらさひあるけど人もとゞめぬ（同）三十七「もりぶくろこれいさもりぬすりぶくろいまいえてーゞおきあさびせむ

もりゆみ 張弓（枕）七ノ廿五 天テンよもりゆみといひ出さり。ナヲ〳〵の所

もぬぬる 刎 **もね**（平家物）二ノ十二 入道の給ひけるいをやつゞ首さうなう切るあよく〳〵紀間ーて云々其後河原へ引出て頭をもねよとぞ宣ひける **もねつく** **もねおとも**

共よ次の **はね馬** の所よ附そ

もぬけどり 羽抜鳥（新六帖）六爲家「夏草の野澤ゞくれのもぬけ鳥ありーゐもあらはあはわゞ身ゝあ

もる 春 **春風** **春雨** **春の空** **春の夜** **春の山邊** **春の野** **春の花** これらのたぐひ抄そるよいとまあらば抄ーさるも多ー順をおひて見るべー

もる 晴。空日月雲雨霞霧雪あど又心の上よいへりそべて出ドへーるそ **もるゝ** **もるく** の所よ附そ

もれ **もれの歌** **もれらゝ** **もれ〳〵ーく** 別よ出は **もはけて** あど次の（狹）四下七 例のことつゞけてあるべゝーき御いらへもなけれをこゞ御心のうちいもるべきやうもなー（山家）上「日をふれば袂の雨の足そひてもはべくゝもなきこゞこゝろゝな **もるゝ**（千）物名 堀川

「秋い霧霧過ぬれば雪ふりてもはゝまもあき深山邊の里 **もるれ**（拾玉）三「夕立のそどもゝりこそ絶間よてもるれいやゞてひぐらーのこゑ **もれて**（源花のえん）初日いとよくもれて（天德歌合記）かくて日のけーきもれて見ゆるそどゐ（榮音樂）三日頃ともれば雨ふりて云々けふいあでをなくもれて **もれさる**（拾玉）五「つきの浦い氷らぬ池よはら、ゐてもれさは空も霞ーゐけり **もれゆく**（金）秋 俊頼「むら雲や月のくはをもそのでふらんもれゆくさびゐてをまさるかあ **いれば**（山家）上「夜をこめて竹のあこ戸よさつ霧のもれはやゞてやあけんとそらん **もれぬぬる**（拾玉）五「いのるかなもこやの山の秋の霧もれぬる後よ又くもはなよ **もれを**（續千）戀四 是則「秋山よ朝さつ霧の峯こめてもれにも物を思ふ頃ゝな **もれせぬ**（山家）上「まゞふ色よ花さもぬれば吉野山もはいもれせぬこねのをらくも **もれぬ**（古）雜下をのゝさだき「都人いかよと問いゞ山たゝみもれぬ雲ゐよこぶとこさへよ **もれやらぬ**（千載）夏 俊惠「夕立のまゞもれやらぬ雲間よりもれあゞ空とも見えぬ月かな **もれぬ心**（拾玉）一「春ゞをこかすみこめたる山里のもれぬこゝろをひとーはらめや **もれぬ思ひ**（古）離別 もとのをこ「秋霧のともよたち出てわゝれあばもれぬ思ひよ戀やこさらむ **もれもくもをも**（風雅）秋中 永福門院「村雲よ隱れあらもれ行月のもれもくもをも秋ぞかあーき

それま 晴間（風雅）同清輔「ひさそらはいとひもてゝむら雲の晴まぞ月ハてをまさをけはゝ（壬生）上「さてゝ猶とふ人もあき山里ハそれ間も霧のうらめしきかな

もる 腫（和名）三ノ廿四 瘤。俗所謂乳腫齒腫宜用此字腫也野王按瘤毛勇反波留 字亦作腫身體皺起虛滿也 **もれ**（神代紀）上ノ十七 脹滿太高（源うはせみ）五 目そこ〜もれたは心ちして今ふハレマブチ（同末つむ）廿六 額にきてよあうもれさはは俗ノ出ヒタヒなるへし（枕）一ノ十三 忠隆さねふさなんうつといへハ云々いとゞけはもれあさましゝけなは犬の云々 **打もれ**（源をとめ）三十五 打もれたはまみも人は見えんゞもづらしきは云々泣もらしたるなり **補**（著聞）廿やゞてもれていくやゞもあくおびさゝしきは瘡となりはけをゝ

○此 **もる腫** ハ動ラ〜いふ詞 **もる晴** と同例よて おしていもゞ **もらに** **もらし** **もらし、** **もらさん**

なゞいふべし **もる張** 以下の **もる** とハ異なり

もる 張 **弓はいへるハ**（古）春下 をつね「梓弓もるさちしより年月のいはゞでとくもおもゆるらあて春と張をらけさり（金）雜上 時房「梓弓さこそハそをの高からめもはやどもなくかへはべしやハ（夫）卅二 西行「をのさめて雀弓もるをのさらはひたひをゞしのゆ

しゞかるらな **琴の緒は** **もりしづむ**（源をらな）下 卅さうの御ことハゆるぶと云々女ハえもりしづめゞを **網は** **もりて**（枕）十一ノ四 今ぞ御こし出させ給ふ云々御網もりて出

させ給ふ 抄、后宮の御こしの御網をもりさる也 **衣きぬは** **もる**（古）春上 貫之「をゞけしゞ衣もるさめふるでとはのべのをどりぞいろまさりける **もりたる**（枕）五ノ十二 うちき又もりたるもあまさ奉りて **もりけり** **もりやる破**（いせ物）四十一段 うへのきぬをあらひて手づからもりけり心ざしハいさしけれどさるいやしきさもならもざりけれゞうへのきぬの肩をもりやりてけを **もる旗に** **もりたて**（古事）下ノ十八 **波多波理陀弓** **錦あやれり物は**

もる（夫）十三 西行「錦もる秋の梢を見せぬらなへさつる霧の園を作りて（同）十五 季經「をつえまでかゝれる蔦ハもみぢしてゝしきをもるハさだのらさ松 **はりたり**（竹とり）内々のをつらひふハ云々綾織物は繪をかきて間でとはもりさり **をを御簾は** **おしたる**（狹）一下八 をを所々おしもりて **ふをま衾は** **もり**（源をま）四十九 海のおもてハ衾をもりたらんやうは光りみちて神ありひらめく **さうゞ障子扇は** 紙もてする類ひ万まいふべし **もらに**（同うき舟）四十六 さうゞもらをべき事なと云々の給ひつけたりけれゞ **もりたり**（宇治拾）五ノ十四 妻戸はあかり障子をたをを、け通りたる事いつの世はもりたりとも見えぎ **もらせて** **もるはゞ**（枕）五ノ廿七 御扇奉らせ給ふお隆家こそいをゞき骨をえて侍れそれをもらせて參らせんとをはそれをろげの紙いとはまゞけれゞもとめ侍るありと申給ふ **あみ網お** 魚鳥又獸はもいふへし **もる**（夫）廿七 貫之「世とハもは鳥の網もは宿なれゞ

身はかゝらんとくは人もなし もりこめ もり籠むるなり（夫）二、寛平御時「春霞あミにもりこめ花
ちらばうつろひぬべし鶯とめよ もりさたを（神代紀）下九 夷曲云々あミ播利和陀嗣云々
補 もる 見張（源 槇柱）四十一 近江君 いとさがなげにらみてもりゐされば わづらはしく
て もりもの 張物（宇治）三 女のかぎりにてもりもの多くとりちらして
此 もる 張 以下の もる は もらを もらをは もらせし もらせん などいふへし もるゝ とはいはず
もれる といへり もりける の約なり
もる 墾。字書に耕也治也とあり新に土を掘うがちて田にも池にも作るをいふ もり（万）十五十（拾）戀三人丸「住吉の岸拔田
に墾まきし稲のさらもかは迄あはぬ君かな（拾）かるねど迄も（拾）物名をけに「池をも
りこめたは水のおそられはいひの口よりあまはなるべし（万）十四十一 信濃道者伊麻能
波里美知（同）十二ノ二 新治今作路清 などいへるは堀うがちなちして道をつくりたるをいふ 補（万）十四十八 く
さかげのあぬなゆらむともりしみちあぬはゆらぞであらくさたちぬ
もる 是は俗にいふごとく頭つらなどうちたゝく事なり もりて もりふせ（今物語）二十 よくき法師のいひごと
らなとてかまちをもりてけり云々かゝるおれものこそ候ひはれもりふせ候ひぬと
かしこ顔にかたりければ
もる 是は木草の芽をいだそをいふ（万）九ノ十二 春は張つゝ秋はちりけり（同）十四十八 青柳の波里てさて

れば（同）十九ノ九 張流柳を などよめるもこの意なり めもむるに 契沖云目も遙なるによせていへる也（いせ物）四十一段（古）
雑上業平（六帖）紫「紫の色こき時はめもむるに野なは草木ぞこらきざりけは（六帖）あ
はきなりけり（順）廿二「めもむはに雪間も青くなりにけりふこそ野邊にさらなつ
みてめ（古）戀二（貫之）下一「はの國のなにもの芦のめもむるにおけきこが戀人なるら
めや（兼盛）廿五「むきたちてめもむるの野にひく松のちとせの數はたがためにぞれ
（古）春上貫之（六帖）上十「霞さち木のめもむるの雪ふきば花なき里も花ぞちりける 此一首目
も遙なる意なくや
むるゝ 春々。春毎の意なり（後撰）雑一友則「春々の數は忘れざありながら花さらぬ木を
何に植けん（大和物）二「春々の花はちはとも咲ぬべし又あひがたき人の世ぞう
き むはゝでと（宇治拾）十二十三「めぐりくは春々でとにさくら花いくたびちりき
人にとはゞや 木こりとらはひちりきの隠し題の哥なり
むるゝ 今と同。遙遠くの意なり。万五廿三にむるゞにおもほゆるらもとよめるもこの意なり（いせ物）九段（古）羇旅業平「から
衣きつゝなきにしつはしあきをむはゞきぬる旅をしぞおもふ むるゝと（源夕
らそ）廿四 いといたくあれて人めもなくむるゞと見こさされて（同夕きり）四十八 ひつ
じ中のくづきたるを見いるればむはゞとおろしこめて（榮紫野）八 十町をかりは

池にてはゝ〳〵と四方の海のけしきにて御舟うらべあゞ〳〵たは(夫)五季經「もるゝ〳〵と雲路にかへは雁がねをいく霞までなゞめやるらん(同)十七親佐「もるゝ〳〵とあいぢの沖にうく鴨をあまの小舟お見ぞまゞへぬる

めもるゝ〳〵(土佐日記)松原めもたはゝ〳〵あり(好忠)二月始「宮木きは小野のかもらを見ささせはめもたはゝ〳〵にあさとりあを

補

もるもな春花(万)十七廿三「世間にかゝるものゝ春花のちりのまがひにをぬべきおもへば(同)卅三「春花のうつろふまでにあひ見ねを月日よみを、妹まつらんぞ(同)卅四長歌たをくしけふたゞを山は波流波奈乃さけはさりに

もるべ宣長の釋に春サキと云々

春べい(古)春上貫之「梅の花匂ふ春べいくらぶ山やをにこゆれどもるくぞありける

もるをいとなむ春のシタクル也(月清)下「千代ふべき松さへ山を出にけり春を營む賤に引れて(夫)十八、後法性寺入道「賤の男い雪を小松にひきそへて春いとなをに深山いづかり

もるをかさぬ春を重ぬ

祈て(續後撰)春上知家「をくは野の浦の濱ゆふいくゝへり春をかさ祈てかををきぬらん

もるをつゞ春を告

ぐる(月清)下「動きなき山の岩根い答へ祈ど春をぞ告る雪の下をづ

もるをむかふ春を迎ふ

ふる(拾玉)五「身にとまは年をも人い送る也春を迎ふる心習ひに

もるをのこを春を殘せ

せは(風雅)夏、式子内親王「櫻色の衣にも又別るゝに春を殘せは宿の藤浪

もるをおくる春を送る(月清)上「見はまゝに花も霞もなこり鳬春をおくはい嶺のまつ風

もるをらを春を知らを

をる(後拾)春上「降はもは雪きえがさき山里に春を知をる鶯の聲

もるゝ遠き意今と同、年月日時はいへるも同

遥(遊仙)詔々(ハルカニ)

遥に(古)繼一貫之「あふ事い雲井もるゝにな

る神の音にき、つ、戀をにはゝな(續古)秋上崇德院「これをこそ雲の上といおもひつれもはゝに月のををのをるこのお(兼盛)十河原の院にて遥に山の櫻を見は哥云々(源若紫)四もるゝに霞をさをて(同よもきふ)八大貳になりぬ云々もるゝあゝくまかりおんとをるに(同あゝ〳〵)十五身のをどをられていとをるゝにぞ思ひ聞えける

遥なりつる(土佐日記)「あま雲のもるゝなりをる桂川袖をひて、もをたりぬるゝな

遥なは(狹)二下卅九あふ夜の限ざになくこ、らの年頃思ひくさけつる筋いもるゝなるにこそいと打思ふい云々

遥なは世界

遥なは所(源東屋)三さはあづはの方のもるゝおるせゝいにうづもれて(同)十一もるゝおる所に打つゞれてをぐ〳〵待りける年頃のをどお

遥なは物(枕)六九、はるかおる物みちの國へゆく人のあふ坂の關こゆるをど、生れたは兒のおとおにはをど猶多〳〵

補

遥より躰語にいへり(宇治)一もるゝより人の聲おを

くゝてと、めきくるおとす

もるかげ（桙）九廿、加茂祭の所よ　いかゐぞ事ありぬやおどいへばまたむでおどいらへて云々

もるこのげよいふ程もなく云々。待間の遠きをいふ（榮さま〳〵）廿一只今ハ此殿こそ今行末もるらげかは御ありさはよたのもゝう見えさせ給ふめれこゝハ行末遠々めでさきをいふ

もるけくき（古）物名「人目故後よあふひのもるけくハわゲつらさにや思ひあされん（拾）哀傷仙慶法師「極樂ハもるけきゐどゝ、聞ゝらどつとめていさる所ありけゐ（千載）共よ空也上人とあり（源さかき）三　もるけき野べそとけいり給ふより（同わらな）上八十二　さはもるけき山の雲霞わまドを給ひにゝ

補　**もるかさまけ**　春方儲（万）五「梅花ちりまゲひさるとらびには鶯おくも春かたまけて（同）十ノ十八　冬方設而ともあり

もるら　是も意ハ同。御箸も下ゝ給とずよそ（源きりつゐ）十九　よそゝくおぼゝ召意也　大床子のお物おどいいともるらゐおゐゐ召されバ（同やどり木）卅二　よゝあるくだ物召よせ又さはへぎ人召てこと更にてうせさせ給ひなどゝつ、そ、のらゝ聞え給へどいともるらにのこおゐゝされバ

もるゲそこ　春霞（古）春上「春霞たてはやいづこそよゝ野のよゝの、山に雪ハふりつ、

春の霞（玉）春下定頼「いろ〳〵の錦と見ゆは花さくら春の霞や立かさぬらん

もるらゝ　**もるらさん**　ともよ次の　**もるく**　の所よ附そ

もるなつ　春夏（かけろふ日記）上、上卅二年かへそて春夏も過ぬきバ

もるのいろ　春の色（古）春下「春の色のいたりいたらぬ里ハあらじさけるさらざは花の見ゆらむ（拾玉）二「岩のきる苔の衣のさびゝきも春のいろをバこそれざりけそ

もるのゐゝき　春の錦（古）春上素性「見そたせバ柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦おそける

もるのゐら　春の外（拾遺員外）上「春日野の雪の下草おのれのみ春の外にやむそび れくらん（新千）雜中、前内大臣「一時の花の咲ゝハ夢おれや春の外おる谷のうもれ木（興）さそふ

もるのゐざゝ　契沖云初の哥をもて後の哥を見れバ春のゐだしとハ霞をいへり（後撰）春中（興風）「山風の花のらかと ふ禁にハ春の霞ぞはさゝおりける（興風）「山里ハ春のゐたゝおとぢられてそみらまどへる鶯ぞおく

もるのとおり　春の隣。去ともそをいふ（古）ないらい深養父「冬おゲら春のとおりのちらけれバ中垣よりぞ花ハちりける

補（月詣）勝茂法師「おげらドなこゲ身ゝとゝはつもはともをゝこゝ春のとおりとれもへば

もるのさられ　春の別（伊勢物）七十七段（續後撰）雜下業平「山の皆うつりてけふよあふ事ハ

もどめ　の處よいだす　**もるのとはり**　**と**の部

春のゐられをとふとあるべし（千）春下仲綱「身のうさも花見し程に忘られき春のゐられをあげくのそらに

もるのゐたゑ 春の記念（拾玉）四「山吹よ井出の川浪立かへり春の形見ゐたゑしとゞまれ

もるのゐけ 春の影ゐて光とおゐドゐるべし（拾遺愚草）中「霞とも花ともいたゞ春のゐけいつこにあれどゐたゞまの浦（拾遺員外）上「江のゑなみ若葉の草も緑ゐて春の影なる神無月哉

もるのかぎり 春の限（後撰）春下貫之「ゆくさきゐ成もやゐはと頼ゑしを春の限にけふゐぞありけは

補 **もるのよの夢**（後撰）春中「祈られぬをゐひてゐゞぬは春のよれ夢をうつゝゐかよしもゞか（同）戀一もる「まどろまぬかべゐも人を見つるゐなまさしからむ春のよの夢（新古）戀五、盛明親王「春のよの夢のゐはしにつらくともそしりざゐあらはたのまむ（同）「枕だゐゐらにいゐゞ見しまゝゐ君かたはなよ春のよれ夢（續千載）戀三家持「あふこと絶こよひ〳〵とたれめにかか〳〵春の夢に見てまし（貫之集）「祈られぬをゐひてわゞぬる春のよの夢のゐきりにこよひありけを（新古）春上定家「春のよゐ夢のゐきもしとゞえして峯ゐゐゐは、横雲のそら（伊勢集）「春のよれ夢ゐあへりと見えつれば思ひさえゐし人ぞまたは、（兼盛集）「思ひつゝ祈いれば見えつ春のよのまさしき夢ゐむゐしからにか（六帖）第五「春のよの夢に見れこそそのゝしゝゐ人の上ゐて見るゐゐひしさ

もるのその（万）十九ノ九春苑くれかるゐはふも、の花

もるのつゐひ 春の使。鶯をさし（夫）二俊成「關こゆは春の使や行やらぬ音羽の山の鶯れ聲（同）同師光「いづちゆく春のゐゐひのうをひそのゐねやゐめしてこゝゐなくらん

もるのならび 春の半（新後撰）釋教湛空上人「やゝぢをば彌陀のみのりゐまりせは、ゐはのならびの月に入ゐき

もるのゐらひ 春の習（新千）春上爲遠「いつしゐゐと野邊ゐ心のあくがは、春の習と若菜摘也

もるのゐでり 春の名殘（新勅）雜四元輔「から崎の濱の眞砂の盡は迄春の名殘に久しからなん

もるのむゐへ 春の迎（長秋詠藻）下「ひきつれて山路ゐ松の見ゆはゐゐ春の迎へをいそぐなりけを

もるのの こを 春の殘り（續拾）雜春和泉式部「青柳の糸も皆おそ絶ゐけれ春の殘に けふ計とて

もるのやよひ 春の三月（拾玉）三「皆人の心ゐか、はものや何春の彌生のゐら川の雲

もるのころも 春の衣。霞をたとへ（壬生）上「まきもくのひゐらの山れ仙人の春の衣とあつ霞ゐな（月清）上「みよしの野のれくゐすむゐは山人の春れ衣にゐををありけを

るのあゝろ　春の心（古）春上業平（いせ物）八十二段「世中にあえて櫻のなかりせば春のこゝろのどけからまし」（風雅）冬貫之「一とせにふたゝび匂ふ梅の花春の心にあらぬあるべし」

るのさが　春のさがさがの。〻〻の意也（後撰）戀二顯忠「鶯の雲井にわびてなく聲をもるのさがとぞきれゝかゝつる」

るのさゝひ　春の境（新勅）冬貫之「降雪を空に幣とぞさむけにる春の境に年のあれば猶ほの部合せ見るべし」

るのめぐみ　春の惠（新千）雜中資明「老果るおどろの道れ下草に春の惠にあふらひもあり」

るのみや　春の宮（頼基集）秋の夜召ありて春宮に參りて雁のるくを「なく雁にくはゝ歸るゝおそつゝかな春の宮にて秋の夜かれゝ（夫）卅五後京極「くれ竹の園よりうつる春の宮兼ても千代の色に見えにき

るのみやま　春の深山。共に春宮ノ御事を申せり（古）雜下みやぢのきよき「つくぐねのこのもとでとに立ぞよは春のみやまのかげをてひつゝ（六帖）四貫之「君をさぬ春のみ山の櫻花涙の露にぬれつゝぞふは

るのみやひと　春の宮人。春宮に仕へ奉る人々をいふ（後撰）夏。朱雀院の春宮におはしましける時帶刀ら五月ばらの御書所にまゐりて酒などたうべて云々大春日師範「五月雨に春の宮人くる時にそと、ぎにそや鶯にせん

るのおらべ　春の調。呂の調子をいふ（古）物名安倍清行「浪の音はけさからことに聞ゆるに春のおらべやあらこまはらむ

るのひ　春の日。るひともいへり別にいざす（六帖）六上「やゝをとも草にもえなん春日野をたゞ春の日にまゝせたらなん」るの日數（新續古）春上雅世「もつゝなは野べのみどりに見えてけり春の日ゝをつまぬ若菜に」るの日かげ（拾遺愚草）上「けふにまさ天つ社の榊葉も春の日影をさゝやそふらん

るのひかり　春の光。春のけしきをいふ（源こてふ）六「いつも春の光りをあめ給へる大殿なれど（月清）上「おもゝげに千里をゝけてこそは哉春のひゝりにあそぶいとゆふ

るのもの　春の物（古）戀三業平（いせ物）二段「おもゝもせぬ孫もせでよるをあゝしてい春のものとておげめくらしつ（千）春上和泉式部「つれ〳〵とふるに涙の雨なる坂春のものとや人はこはらむ（壬生）上「咲そめていくゝもへぬを藤の花春のものとにけふのみや見む

るく　胸をハラスをいふ　るくべき（源すゞむし）十六「やう〳〵さは御心ざしをなを給ひてゝの御けふりむるくべき事をせさせ給へ」るかし（同夢のうき橋）十四「愛おふの罪をもるゝ聞え給ひて」るゝさん（いせ物）九十五段「おもひつめたは事をこしもるゝさん

もるゝさで（千）哀傷茨子「むかしこつおもひをたゞももるゝさで煙とならん事ぞうなしき」補（万代）光俊「もるゝさでやこゝ一身をぞおもひしるかをめは月のよものあれこ」もるけん（源夕きり）卅五あらゞひもるけんことのもなくてもるけん方なく（同とゝきゝ）四十七思へりしけしきなどのいとゞしさもるけん方なくおゞしこさる」もるけ待ん（同とゝひめ）卅一いふせゝりしき霧のまよひもたはけ待らん」もるけてしゝゞか（同やたる）三れもふこゝとをもかたもしもるけてしゝか聞えもるけん（うつゞとしのけ）そこゝておゞつゝかからに聞えもるけん」もるけどころ（源さゝき）廿四をこしゝ物思ひのはるけ所あは心ちしゝ給ふ（同夕きり）七十三をこしゝ物思ひもるけ所ゝおゞさきて（同紅とい）十さゝしきひゞをのありけるをやをゝまどふもはけ所ゝ聞えおゝさんかしゝとて云々

もるくはゝれるとしゝ春加いを。春閏月のあるをいふ（古）春上伊勢「さくら花春くもゝれは年たゝも人の心ゝあゝれやゝせぬ（風雅）春下題季「常よりものどけく匂へ櫻花もはくもゝれは年のもるしゝ秋くもゝれる年」（清正集）ゝ見も

もるくはゝゝ春來る。東方を方いふ（拾遺員外）上「あさひさに岸の青柳打なびき春くはゝ方ゝまづしゝるきゝな

もるくさ春草（新六帖）六衣笠内大臣「山陰やはくりをてたはあら小田のこぞれふは道ゝをゞる春草

もるやま春山（万）十ノ十三（六帖）下一「春山の霧ゝまとへは鶯もわれゝまさゞて物思もめや（六帖）思ふらんや（古事記）中ノ六十三春山之霞壯夫（カスミヲトコ）補（新拾）雜上、法皇御製「春山の霞のれくのよぶこ鳥世のかくれがゝたれさそふらむ

補もるまけて（万）十九ノ九春儲（ハルマウケ）而ものゝあしきゝさよふけてもふりあくしぎたゞ田ゝゝそむ

もるけき　もるゝ附の所ゝ　もるけん　など　もるく出の所ゝ

もるでろ春頃（後拾）羇旅もるでろ田舍よりのゞを侍りける道ゝて源道濟　春の頃抄をゝ及もび

もるでま春駒（堀川）春駒國信「さゞ物とをめ野ゝかひしゝ春駒ゝ手ゝもかゝらはあれまさはゝか

もるあき春秋（拾）雜下、ある所ゝ春秋いづれゝまさるると問ゝせ給ひけるゝ云々貫之「春秋ゝれもひみさをてさきゝゝ時ゝはけつゝうつるこゝろゝ

もるされば春去者。去ハ借字ゝて。夕さればなぞ（万）十ノ十三「春去者うの花くさしゝ吾こえしゝ妹ゞ垣間ゝあれゝけるゝも（古）旋頭哥「春されば野べゝまづさくそれどあゝ

ぬ花まひなーはたゞあのるべき花の名あれや［されば］ゝ［さ］の部より出を

補 ［もるさめのはな］（玉葉）春下從二位爲子「咲出は八重山吹の色ぬれてさくらなみよる春さめはもる

［もるめくき］春めく俗より同（拾玉）四「花ゝまたし心ゝ空よりあさとり春めく頃の白川のさと（同）一「野べより出てゐぐつむ澤のあさみどり春めきはけをたづげけーきも

［もるひ］春日。春の日といへるより同ー但（大和物）二「大空をてさは春日の影あれやよそよれそーてのどけゝるらむ（同）一「青柳の糸うちもへてのどゝなるもはひーもこそ思ひいてけれ（風雅）春中太上天皇「つゞくらめ簾の外よりあまさ見えてもるひのどけそ人ゝけもせぬ補（万）十七ノ四十八 ながき春日もさををてれもへや

［もるけ］葉分。あひざゝをもけて葉毎より露霜の草よりもいへり（六帖）六笹「玉笹の葉をきまれけは白露の今いく代へんさきならおくゐ［葉分の露］（中務）廿七 中宮の御さうーか、せ給ひけるれくより玉笹の葉分ふやどるといふことかきて參らせたれバ宮より「見れど猶野べよりれせぬ玉笹のもるけの露ゝいつもさえせど（続古）雜下 さえ

［葉分の霜］（源藤とりま）十六「朝日さを光を見ても玉笹のもるけの霜をけさぞもあらなん補（拾遺愚）「冬來てゝ一よ一よを玉笹の葉分乃霜のところせきまで［葉分の雪］

此虚補のはかの別行ゐ立へき語なるを上

（夫）十八西行「うらかくををこの衣とこめる哉竹のもるけゐふれは白雪［葉分の風］（新拾）夏等持院贈左大臣「吳竹のよをへて秋や近からんもるけの風れ音のをゞーき［葉分の波］（壬生）上「夏ゞりの玉江の芦も霜がれて葉分の波よをーぞなくなは［萩の葉分］（後拾）秋上橘爲義「いゝよーて玉ゐもぬゝん夕されゞ萩の葉分よむすぶ白露［葉分の月］（同）中「草の原光りも露もひとつゐて葉もけの月よぬるゝ袖ゝゐ補（續千）秋下爲實「さゝ竹の大宮人ゝとひもこで葉分の月をひとりこそ見れ（同）同後鳥羽院「袖の上よあれてもゝゐーれく山の松の葉分の有明の月（新續古）秋上等持院贈左大臣「さえにふく槇の葉分の秋風より深山の月や夜さむゐるらん（拾遺愚）中「秋の露もさゞもりためや岡べなは松の葉分の月れ衣手

［もり］［いづこをもり］。イヅコヲ限リの意ナリ。墓より已より［い］の部より出を

［もり］墓［御陵］（万）二ノ廿四 かーこきや御陵つゝふる山ーゐの鏡の山より云々（源をま）十六院の御墓をゞ奉り給ふとて北山へまうで給ふ云々（同）十八御もりゝ道の草をげくなりて（同やとりき）七十一 いゝでかの御もりよだに參らんとの給ふゐる［親のもり］（後拾）春下三月つごもりの日おやゐもりゝゐまりてよめは補（万）十六卅一「あめゐるやさゝらの小野より茅草苅草苅婆可爾うづらをたつも（同）四ノ十七 秋田之穂田乃刈婆加云々（同）十ノ

の引續ゐ載たるゝ印刷の際混て入し誤なり

八卅「秋田吾苅婆可能過ぬれば雁が鳴きこゆ冬ゝたまけて（廣足云此苅婆可の事（玉小琴）ゟ委しく說て圖をも出さをたり（畧解）ゟは其說を畧していへり、さて俗ゟもゝゆく、もゝゆゝぬ、もゝどる、もゝどらぬ、おどいふゐ此語より出たるあり

もゝどころ　墓所。たゞ墓といへるゟ同じ（更級日記）此めのとの墓どころ見てなく〳〵かへりさをし（新古）哀傷　右近中將通宗の墓所ゟまこのりて

もゝ〴〵しく　俗ゟ同、ハキ〳〵スル（源をいふ方ゟいへり）廿九さしももゝ〴〵しくおもさゝゝゝる御うゝろゝゝ（同夕ゝを）四十もゝ〴〵しくゝさの給ふともかゝゝは道ゟゐて出奉るべきゝゝ

もゝ〴〵しう　（うつを　樓の上）上六十御琴ゝ云々答れ〳〵しうなりゟて侍れゞもゝ〴〵しうも侍ゝ（源きりつを）十二もゝ〴〵しうものゝ給ゝせやゝにむせゝへらせ給ひつゝ（同夕ゝを）四十御馬ゟもゝ〴〵しうのり給ふまゝき御さまなれゞ

もゝ〴〵しからぎ（落くを）一親ゟとくおくれて心もゝ〴〵しからにぞあらんゝ

補（宇拾）九ノ廿一うたゝゝよゝてんやといへもゝ〴〵からにぞ候ともよゝ候ゐんと申に

もゝ〴〵しらぬ（枕）十一廿三木どもゐどもゝ〴〵からぬ中ゟ柳といひて例のやうにゐまをゝ〴〵くゝゝあらで葉ひろう見えてよくげなるを

もゝ〴〵しからね（源若紫）五卅故御息所ゟれくれ奉り〳〵ゐどもゝ〴〵から糸ど思ひ出て淺ゝのらぎとふらひ給へり

もゝ〴〵しき（同　箒木）九もゝ〴〵しき世のかためとゐるべきもまことのうつゝ物とゐるべををとり出さんゟはゝさかるべ〳〵ゝ（同あけまき）廿二年つもりさゝ〳〵げゟおのゝゝ、心をやりて似つゝゝ〳〵げゐる事を聞えゐらにれどこゝゝもゝ〴〵しき事ゝゝ云々

もがへ　葉替。枯て生ひかもるをいふ（拾）雜戀「もゝ〳〵鷹のとゝへる山の椎柴の葉がへゝをとゐ君ゝゝへせゝ（堀川）（顯季集）（夫）廿六「葉がへせゝ芦もまゝらゟありもて、くきのゟさりゝさびゝゝりけを（集）ぞける

もがへぬ　葉のかゝらぬをいふ（後拾）雜四御製「万代の秋をもゐらで過きたる葉ゝへぬ谷の岩根松ゐ（永久）椎柴仲實「いつとゐく葉がへぬ山乃推柴ゟ人の心をなすよ〳〵もがゐ

もがへ　羽替。鳥の毛のぬけゝゝるゐり（夫）廿七、權僧正公朝「雪ふれゞゝ山鳥のもがへ〳〵て槇の梢ゟ驚ぞむれゐる　是ゝ羽の白くゐひゝゝるゐるやうゐるをいふ

もゝり　秤（和名）十四三稱量具、知輕重謂之稱。權衡（漢語抄云權衡加良波可利）廣雅云錘謂之權（チハカリ）オモシ　波加利乃於毛之（宇治拾）二六箔うちの件の金をとりて云々もゝりかけて見れゞ十八兩ぞありける

いなゞゝり　稻秤（夫）卅三知家「民の戸ゟ秋をさめをゐいゐもゝり年ゐる御代をゝけてゐるゝ〳〵

もゝりの石（同）同權僧正公朝「ゝけ稻のもゝりの石ゝれもくとゐもこと〳〵ゝ民のうれへゐらゞゐ

水もゝり（和名）十五準繩（ミヅハカリ）　み の部ゟ出を

たゝゞゝり

（和名）十四尺竹量也（タカハカリ）[た]の部ヨリ出ル ちゝでふのいちり（新六帖）五、衣笠内大臣「誰も皆心よりけて思へ

[むちり] 限りの意にて俗ヨリいふアテドなり [いづこむちり] [いづこをむちり] 已ヨリ [い]の部ヨリ出ル

らゝでふのむちりのれもさかろさを

[雲をむちりよ]（夫）卅六西行「よゝ野山雲をむちりよ尋ね入て心よりけゝ花をたるゝかな

雲とミユル限りアテドの意也。此哥秤を兼てよめり俗の足をむちりニ又コンカギリなどいへるヨ語意同

[むちりなき] [あふむちりなき] 逢ふ期なきと同語よていつと（六帖）五下（菅万）（夫）卅二寛平御時よみ人しらず「かけつれバちゞのこがねも數ゝをぬなどこゝろ戀のあふむちりなきぞさりぬ（菅万）

アフアテノナキ意なるべゝ

[あふむちりなく]（後撰）戀六。心ざゝとバ哀と思へど人目ヨリ「あふむちりなくてのそふはんつゝむといひて侍りけれバ

こゝろ戀を人目ヨかくることのさびゝさ

二首共ヨ秤をちりねさり 補 なゞ限りの意ヨ秤を兼ていふ詞（順集）「露をれも

たえぬバちりの青柳いくめかけさるこが糸かるらん（万代）「かぞふともかけ

てもおらゞつきもせじいふバちりなき君ゲよもひい（同）「年をへてあふむちりな

ゞ我戀をかけてもいゝで人ヨおらせな

[むちり] 蹤血。今いふノリノアトなり（和名）四照射の續捜神記云云々見二一白鹿射中之明日辰所ヨ

尋蹤血矣今按俗云云々蹤血波加利（人丸）「とめゆゝんつぶさヨあとい見えぎと

も鹿のむちりいおるといふなり 契沖云今もなゝヨていい申ス詞ゐや肥前の國のものゝ申たるを承りき 補 廣足云今肥後の俗ヨ何

ヨもあれ物のおたゝヨ行をむちりひくといへり是蹤血よりうつりてひくい引ゆく心ヨいへるなるべゝ

[むちり] ホドコロノミなど譯ス意いい皆同。又ノミ（いせ物）九段比えの山をむちち

の意ホドの意なるい今もばちりといへり

バちりかさ糸あげたらんそどゝてハタチホド也（同）廿七段「ゐれバちり物思ふ人い又もあ

らゞと思へバ水のおたヨもありけヨ ワレホド、ワレクラサ、ワガヤウニの意なり（六帖）四（古）戀上躬恒「ゐ

れバちり（古ヨガごとくゐれを思ん人もゲなさてもやうきと世を心みん（貫之）卅二（風雅）

春中「まさおらぬ所までかく來て見れば櫻バちりれ花なりをけり（宇治拾）十四、廿二わゲ

國ヨ算れく者い多かれど汝バちり此道ヨ心得さはもれいなきなヨ（うつを國ゆつヨ）

下一人れ心バちりくちをゝき物こそなけれ（枕）九ノ廿八大藏卿バちり耳とき人なゝまて

とヨ蚊のまつげのれつるそども聞つけ給ひつべくこそありゝゲ（同）十ノ十四親ヨも君

ヨもそべて打かさらふ人ヨも人ゐ思いれんもちりめでさき事いあらゞ（六帖）五「月

かげヨ見えゝ尾花のそのゝゝとあけつるもちりさびゝきいあゝ（源さゝき）四十九

なきぬバちりいへバ（同東や）五 ろくをとらもる事うづむもちりよてもてさゞ

（後撰）戀二（貫之）下四「色ならバうつるもちりも染てまゝ思ふ心をえやいこせけるおる

人ぞおき（貫）ウツルホド、ウツルクラサ也（竹とり）宵打過て子の時もちりヨ子ノ時ゴロ也（同）八月十五日もち

りの月ヨ（源さゝき）三 九月七日もちりおれぱむげヨけふあをとれぞ比ヨ（うつを

くら開）中卅七さ侍りぬべくいその日もりり御むらへはまゐりこん（其日ノコロ也）（源さゝき）

廿こよひもりやとまちけるさはあり（今夜ゴロや。そべて其時其日ヲ慥ニサシテイヘルトハ其前後ヲ大方ノ意なり）

コロトイヘルトハ（竹とり）三年ばりありて（三年ホドなり）（拾）戀一（貫之）下六「ぬきみだ

イサヽカタガヘリ

はゝ涙の玉も（貫）涙もとはるやと玉のをもりあむんといもあん（貫）あふあ。玉ノチホドシ

ハシノ間の意あり（うつを國ゆつり）下卅一君卅よもりはてあいぎやうづき匂ひやりあり

三十余グラ井あり（源竹川）五四位の侍從其頃ハ十四五ぞりゐて（いせ物）百十四段「翁さび人な

とがめそ狩ころもけふもりとぞたづもなくある（今日ノミあり）（うつを國ゆつり）下廿九兵衛の

君そもうの君あてきばりして又人めしよせば（源末摘花）卅みちの國紙のあつで

えさるよ句ひぞりハふりうしめ給へを（古）戀四素性「今てんといひしもりを命よてまつ

れあり明の月を待いでつりな（後撰）雜四女の母「今てんといひしもりを長月

よけぬべしさくさめろとゞ補（宇治）十一年四十あまりばりなは男の（同）十八これハ

卅ゐはりばりある僧の（廣足云ばりりと第一集よあまさあげていへるを見るへし）もりりの一格

（枕）十二ノ二舟ゐのりてありくもりりゆゝしきものこそあけれ（古）戀三忠岑「有明のつれ

あく見えしわられよりありつきもりりうれものハあし（詞花）雜下待賢門院安藝「人ゑきぞ物

おもふをりもありしりど此てとぞりりあしきハなし（續千）雜中玄惠「つれなくて世

よあり明の月も見つさゞわれもりりうき物ハあし（これらのばりりのつりひざまゝおずゑをあけれあしと留たるな

り玄かる（源居翁）「世中よよし野の山乃もあもりりれ、しまさはものハありけをれさる

ハ語格たがひて（と、いふへきところなるべしかくあるといふ）（枕）

やあらんこハ（かさわ結びさる例ハ古哥よハ見あさらす）

三ノ十五とのもりづりさこそあはをりしきものハあれ（此語勢あどをおぼえたがひていれさるみやあらんくもしくハ

詞玉緒補遺の附錄よいへをばこゝよハ畧きつ

もりりでと　計謀。そべて國を治め家をとゝのふるむべ〳〵しきもりりごとをもとめ城をりまへ粮をさくハへて賊盜を防ぐの計ハ詐謀といふべきよあらもさきを戰ひハ敵を欺きもりる事をむねとそれば（神武紀）よ制變（パカリコトと黙しさり

此詞欺く意のもりるにもかよもして二樣よいふべし

菊のえん）上二さやうあるもりりでとをやせはしおど思へとぞかやうよもせらはゝとて

あん。古くハ大りよハ　たばりりでと　といへり但欺（平治物語）三昔將門が頸を獄門よ被掛た

く意よあらず

りけるを藤六左近といふ數奇の者が見て「將門ハこめりみよりぞきられける俵藤

太がもりりでとよて

もりりでつごち　是ハ欺く。右のもりりでとゝいへるをたゞ猶執念（シフチン）を云ふねくおど

いへるが意なり　用の語ようごかしいへるおり　ごと（源もしひめ）四十年頃よからぬ人の心をつけたりけるゞ人をもりりでちて西

の海のもてまでとりもてまりよりばり云々　でちハまつりでちいへる政を動りし。ひとりごと

ちひとりごさるゝ

おどと語意同し

もろる 思量の量の字あて次わ出ーたるもろちふ同く俗ょ いふ分別そる事、又測の字おどみてッモル意おり

の部ょ出そ (万)二ノ廿七 神集集座而神分分之時 **もろり得** もろりえたるみてレウケンニ及ズ意おり (散木)

中卅二 阿彌陀佛の御身ハ世の中ょこちてもろりうべらきといふことをよめは ハカリエヌハ

限りもおくてッモラレヌ意なり **もろりおる** 意右ょ同 (夫)六 公實 「やきゞ松の色ょ匂へる山吹ハもろりも

知らぬ花の色ろな ハカリシラレヌハ限りもなくコトノ外おる意也 **もろらざるょ** 思ひもよらぬ意也 (續拾)雜上 皇大

后宮俊成前中納言定家かきて侍りける草子をもろらざるょつたへさそけるを云々

(宇治拾)十二十八 梵天諸天來りて守り給ひけれハもろらざるょ寶出來て云々。案スルニ

(和名)十四ノ三 稱量具ょ 今案知長短謂之度知輕重謂之稱知多少謂之量と見え

(同)七丁 裁縫具ょ 尺竹量也 太加波可利 と訓ー たるハ俗の物サシのこと也 (江次第)七ノ冊 節折御裝束

の所ょも量御躰五度先量身長次量自兩肩至御足次云々 次云々 凡竹九枝云々と

ありー。又(和名)十四ノ三 斛の所ょ龠合升斗斛所以量多少也と註ー又前ょ出ーさは(平

治物語)ょひきさる歌も「俵藤太ゲもろりでとよて こハ出ーたる(夫木)の哥も秤ょてもろり知るとよ。

を兼てよめるなり されはそへて寸尺ょも升ょも 俗の如く又秤ょも皆もろりはといふべー。秤ょ

ハ多くハかくると云り 補(風雅)雜中 爲兼 「ものとーてもろりをゲさーなよわ沉水ょおもき船ーもう

ろふとおもへば

もろは 議。是ハ俗の相談スル意なり是も前のに同く **さだろる** といへり (大和物語)ょ見ゆ。但相談スル意なるハ古くも大方ハ

かさらひ合せおどい(うつゝさゝこそ)十六北方そけむ絲とろたらふ所ょ いさゝろなる事もろり

聞えんとてぞや人ょハの給ハゞとておん云々。古き物ょは 思慮を意の **もろる** も多くハ

ただろる といひ **もろりでと** をも **さもろりでと** 又体の詞ょ **さばろり** といへり

さばろは ハ欺く意。 さて欺く事を普通ょはもろるとハいへり次ょ出ーたるを見るべー。今の俗ハもろるをゲ思慮

く事をたばろるといひ馴たるハ古今うらうへのたがひなり **たもろは** **思ひたもろり** **たもろりでと** 共ょ

た の部ょ出そ **たもろり**

もろる 欺く意也 (後撰)秋中 「白玉の秋乃木の葉ょやどれはと見ゆるハ露のもろはか

りけそ(六帖)四 「心こそ心をもろはは心おれ心のあだハ心なりけり(六帖)六丁(貫之)

「ま松くともきつるろひおく花を、祝不ょいで、風のもろはなそけり (土佐日記)

「たつなみを雪ろ花ろとふく風わよせつゝ、人をもろはべらおそ(榮衣のさま)廿八 兒

もろはやうよこーらへおろせ給ひーハかくまこそありけれ **もろりえたる** (枕)十ノ十八

うれーき物、いミどうこれハとおもひてもたり顏なは人もろり得さは **もろらは**

(元眞)十三 「定めおくま松く尾花の花を、きはよいつる秋ハもろらは、ろか **もろら**

れ (源タゝゃ)十四 そらおゞれーてなんもろられまろりありく **もろられて** (能宣)七

(玉)三「さりともたのむこゝろまもられてをれぬものゝ命ありけり」(うつほ
とゝかけ)むゝゝ千蔭のおとゞたゞひとりでをまゝ母よもられて今ゝ音よも聞
えぎとおんいふおは　むゝらせ(枕)七十六御門の歎　などかくむゝらせおもゝまは
き給ふ所よ

補(好忠百首)夏「おつゝゝく吹來る風よもゝられてうもひもさゝでくらもそろゝお

むゞため　齒固(土佐日記)いもゝあらめもむゞよめもあゝ(源さつ絲)初むがためのいもひゝてもちひかゞゝをさへとりよせて(枕)三八、木ゝの所めづり葉の云々又よもひのぶはむゞよめのぐよもゝてつゝひよめはゝ云々(花鳥)齒固ゝ元三の日の事なり齒ゝよもひよよめり

よもひをゝよむる意也　江次第　一ノ十七　内膳自右青瑣門供御齒固具盛青瓷件瓷自所度於内膳毎物有蓋擎子采女傳取之自第三間御几帳上付女藏人女藏人傳陪膳大根一坏芹串刺二坏押鮎一坏煑鹽鮎一坏猪完一坏以雉代之鹿完一坏以田鳥代之以上七坏之内精進物供於第一御臺魚類供二御臺。此齒固の具よも(同)廿自御厨子所供御齒固具又供御藥酒等以高坏六本献之有餅鏡用近江火切。ちゝをゞゝもちひのきいもふを齒固といふやうよ思へるゝあやまりなるべゝ

補むゝよ　齒形(小大君)春宮よておもそびのゆゝゝげなるよむゞよのつれたるを見て「くひどころ見れゞうねなはおいおれびうをたる人のくへるおるべゝ

むゝお　むゝなかは　の類ひ次の　むゝなよ　の所よ附そ　むゝおくなは　死ぬるをいふ(源さゝゝき)廿一いといたく思ひおげれてむゝなくおを侍りよゝゝを(同さゝひめ)廿六三條の宮よさふらひゝ小侍從いむゝなくなを侍りよけるとをのゝよ聞侍りゝ云々此余

むゝなくおう　むゝなき　むゝなき夢　おどもべて　むゝおゝ　の所よ出そ

むゝおきなさけ　むゝなき情。かりそめの。好色おりてををを(さゝゝき)の卷の注よ花もをち月雪おとの折ふゝよ歌よみなどをる意おりと釋ゝたるゝ大きおるあやまり也

むゝおきついでのなさけ(源はゝきゝ)十うゝろをの方ゝ物の哀れおりをぐゝむゝおれついでのなさけあり　むゝおきをどの情(源よもきふ)初いゝめゝき御いれをひよこそことふもあられむゝおきをどの御情をゝりとれをゝたりゝゝどはちうけ給ふ御袂のせもきよは大空の星ゝひゝりをたらひれ水ようつゝさるこゝちゝてむゝおき事の情(同みをつくゝ)卅五云々など親げり申給へゞいとも

づゝゝれを御ありさよよびんおき事聞召つはられゞといひ思ひつゝむゝおき事の情もさらよつくらぎ

むゝおゝ　長くたもさぎもろくかりそめなる意よて水のあを夢などをいへるもをべてもろくてチョットナシタルものゝ意あり。年月のむゝなく過るおどいふもを何をカウトトリシメタルモナシチョットノ間ニの意よて又何ノカヒナクセンモナキ意もあり。むゝいむゝゝのむゝよてむゝなゝいむゝゝからぬ意おるべゝ。又俗のたゞチョットといふべ。シカトセヌ事チット。又タヨワキ意。本の意いき所よむゝなくといへり。シタルコトをもいふ。よもいへり　皆同ゝ

（新後拾）戀二今上御製「うつゝよはあふ夜もさらぬ見る夢をもろあゝとていたのみこそせめ」補石原正明云もろあくハ俗ゐもろあといふれもひもろ（新古）戀五式子内親王「もろなくぞさらぬ命を歎きこゝさぐかねでとのかゝりける世よ（同）同辨「過よけはよものちぎりもさそられていとふうき身のもてぞもろなき

もろあゝでと　事ゐも言ゐも通ハ〜ていふべゝ。トリトメタル意ナリ（源さゝき）十八かやうのもろあゝでとどもをまぎはゝことなきまゝまこあ此大將のかゝはもろあゝでといひさるもまたこそきりざりつれ（同竹川）十二こよひハすこゝ打とけてもろあゝでとあどもいふ

もろあ　もろあゝをもぶきていへるあり　もろあなげら（かけろふ日記）上卅二もろなあげら秋冬もそでゝつ　もろあのちぎり（源もみちのうの）九もろあの契りやもろあの露（新古）羈旅有家「ふゝこびぬさの、小笹のかり枕もろあれ露や一夜もろりゐ　もろあでと　前のもろあゝでとよ同ゝ（うつゝ菊のえん）上十二かゝはは身をもちてなぞ此もろあでとハ　もろあもの（源ゆふ霧）十九惡らうハさふねきやうあれどでつゝやうにまつもれたるはろあものなりと聲ハろきていろり給ふヨワキ物の意なり賤ゝき詞よ　もろあたち（枕）五十九屋のさまももろあたちてもゝちくあさもろあれどカリソメニックリタルヤウナルをいふ（源玉のうつら）卅五て

書也ハもろあたちてよろゞハゝゝけれど意ハ前のよ同ゝ是ハタヨワキ也（同タろゞ）四十もろあびたるこそ女ハらうたけれ。だちもびもめきの意也

もろなく（拾）夏中務「夏の夜ハ浦島の子ゲ箱なれやもろあくあけてくやゝかるらん（源きりつゞ）九もろあく日頃過て後のさざあどにもこまかよとふらハせ給ふ（宇治拾）八ノ十四もろあく年月過て（枕）五ノ十無名といふ琵琶の御ことを云々たゞいともろあく名もあゝとの給ハせたはは猶いとめでさくこそ覺えゝ（チョットナリ）（源えゝきゝ）八もろあくゐ出たることさざも故あらゐ見えたらん）古）戀二忠岑「秋風ゐろきあを琴の聲よさへ▲もろあく人の戀ゝかるらん（チョットニモ也此歌ハ▲の所ゐナゼニの意をふくめたり）（新拾）雜中經信「たれゲそむ宿のつまともろらあくゐもろあくかけるさゝゲゐのあと（イヒを）（ろりろめゐて）

もろあくて（齋宮）五「もろあくて年ふる雪も今見れゞあり」人ゐハおとらさりけり（タヨワキ意也）（ハカナク年ノ〜ヌルを兼たり）（同）十「もろあくて雲とあるとも山彦のこたへもろりハそらよいろよせん（死ぬるをモロキ物ゐいひたる也）（いせ物）廿二段もろあくてたえよけるなろ（長クモアヒナレヌ意也）（源タろゞ）三十四かくもろあくてこれもいたづらゐありぬるあめりと云々世の中の定めあきをいふ

もろあくも（小町）十九（玉葉）戀三「もろなくも枕定めぎあろを哉夢がたりせゝ人そまつとてかひもあき心あり　もろあう（源ろゞ紫）廿一弁の君扇もろあう打あらゝてとよらの寺

の西なるやとうたふ(チヨットなり)(同なゝ合)十六俄なるやうなれどをかしきさまにはかなう
なして左右の御繪ども参らせ給ふ
はかなかる はかなくあるの約なり(後撰)戀四「はかなかる夢のしるしにはかられてうつゝに
まくる身とやなりなん はかなかりし はかなからん 同例なり(源夕がほ)四十三はかなか
りしゆふべより云々 夕がほの花をりし時の事をいふ○カリソメナリシ意也(枕)三十四川は飛鳥川淵瀬さだめな
くはかなからんといと哀れなり 長クタモタヌ意也
はかなげ(源え、き、)廿六歌云々とはかなげにいひなして(チヨットなり)(同かしはぎ)三十青に
やせてあさましうはかなげにて打ふし給へる御さま 煩ひてヨワゲなるをいふ
はかなさ(千)雜中、法親王覺性「はかなさをうらみもせでド櫻花うき世は誰も心ならぬを
はかなみ はかなさの意也(いせ物)段百三(古)戀三(業平)廿六「ねぬる夜の夢をはかなみまどろ
めばいやはかなにもなりまさる哉
○はかなき はかなき夢(後撰)戀三「時の間のうつゝを忍ぶ心こそはかなき夢にま
さらざりけれ これら長クタモタズカリソメの意なり はかなきは(古)戀一「行水に數かくよりもはかなき
は思はぬ人を思ふなりけり カヒナキ意なり はかなき世(千)釋教登蓮「おどろかぬわが心こそ
うかりけれはかなき世をば夢と見ながら はかなきあと(新勅)戀二、本院侍從「庭たづみ行

かたならぬ物思ひにはかなきあとのきえぬべきかな はかなき色(玉)雜三貫之「もる山
のみねのもみぢもちりにけりはかなき色のをしくもある哉 はかなき物(古)哀傷千里「
もみぢを風にまかせて見るよりもはかなき物は命なりけり(源繪合)廿繪かく事
のみなんあやしくはかなき物から シカトシタル藝ならぬ意なり はかなきすさび(同え、き、)五は
かなきすさびをも人まねに心をいるゝ事もあるに はかなきあそびわざ(同はし姫)
六琴ならはし碁うち篇つきなどはかなきあそびわざにつけても 是もチヨットシタルあそびわざで
との意也 はかなき事(同は、き、)十六はかなき事にだにかくこそ侍れ(同さしひめ)六
池の水鳥どものむね打かはしつゝおのがじゝさへづる聲などを常ははかなき事と
見給ひしかども チヨットシタル事の意なり はかなき紙(同夕ぎり)四十三はかなき紙のもしに 歌云々
チヨットシタ紙をいふ はかなき花紅葉(同きりつぼ)廿六はかなき花もみぢにつけても 花やもみぢの
カリソメナル物ナルをいふ はかなき木草(同朝がほ)九はかなき木草につけたる御かへりなどの
折すぐさぬも チヨットシタル木草をいふ はかなきこゝち(同きりつぼ)六その年の夏御息所はか
なき心ちにわづらひて トリトメタル病ニアラズチヨットシタ風ノコヽチなどいへる意也
はかもなく(うつぼさ、こそ)廿 そけむね讒言をいれど用ゐられぬ所に そけむね何のはかもなくて眠りぬ
カヒナキ意也(源匂宮)八はかもなくおほどき給へる女の御さとりのほどに蓮の露もあ

きらゝお玉とみがき給むん事ゝたゝ男のやうゐいシ（カトセヌ意なり）補（忠見）「むゝもなくうきて見ゆれどおらくものの山はもゝ、るものとあらばや（源紅梅）むゝもなくおゐとき給へる女の御さとをのゐどゝ（兼盛）「むゝもなくおつる涙をつゝみてぞ人めもるといいふべゝりける

むゝもなき（寛平歌合）貫之「むゝもなき夏の草葉はおく露をいのちとたのむ虫のむゝなさ（和泉式）「むゝもなき夢をたゞ見てあゝしれていなまをゝ夏のよゞたりはせむ（同）「むゝもなき世をたのむゝなよひのまのうたゝねまだは夢い見ぎやと（元眞）「むゝもなきあと、見るゝらうれしきいくらむゝりの涙なるらん（齋宮女御集）「むゝもなき世とをてむてゝ人ぞまづけふりとおりてさきだちはける（和泉式續集）「人いいざとゞたまゝひいむゝもなきよひの夢路はあくゞれゐけり（同）「むゝもなき露をもさらはいひおきてあるはもあらぬ身をいゝはせん（同）云々いふゝひなゝやむゝもなき身い

むゝらふ　前ゐ出せる思量又商議の意のむゝるは同ゝむゝるを（神代紀）廿一　于時八のべたる也俗と同ゝフンベッスル又相談スル意ゐり（カヒ）十万神會合於天安河邊計其可禱之方云々

むからひて（同）上四　立於天浮橋之上共計曰云々（源あゝゝ）四十　心もそらなれと人間をむゝらひて（宇治拾）三、三十貞文と本院侍從との段ゐ物の衷れなる夕ぐれのそら又月のあゝき夜などえんは人の目とゞめつべきほどをむゝらひつ、おとづれけれを女も見ゝりてむゝらひ定む（うつゐとゝゝけ）御いそきの料はとてあやうを物かとりのきぬおどおゐく奉れを御くゝけどのをる人おまへにてむゝらひさめそ、めく補

むゝらせ給（宇治）七ノ十四　觀音むゝらせ給てとおれを○むゝらひ　体の詞（うつゐ國ゆつり）中、七十二、ゐとゞゐ給ふ御門御詞　さらをとゝゝくも皆むゝらひまあるべき事おるをまづと思いれんをたれも〳〵と仰らるれを（著聞）一十七　大明神の御むゝらひはて衆徒合戰利はゝける嚴重おりける事おり

むゝらう　八講（枕）二廿　上達めけちえんの八講ゝ給ふゐ御むゝらう（源さゝき）卅九　十二月十よ日むゝり中宮の御むゝうなり云々むゝめの日いつぎの日い云々又の日い云々五卷の日おれを云々（百錬抄）四　寛弘元年五月十九日左大臣奉爲東三條院修八講五卷日所々有捧物（元亨釋書）勤操傳　初操居大安寺隣房有榮好者養老母於寺側操與好善常見之貴好之篤孝也好已殂矣操潛葬好于野蓋訝好之母有聞也使童謂人云吾師佗之次日操飯分猶好之爲母聞之慟絶不起操大嘆乃共同志七人葬好母於岩淵寺後操及七人反寺操語云吾代榮好養其母養不艾命已斷未足酬好欲薦冥福補養我等八人分法華八卷逢盧忌名講一卷爲追福公等許否七人皆諾設四日二座講席修之名曰法華八講會于時延暦十五年也毎年不缺諸寺名岩淵八講矣

むげくれ　葉隱（式子内親王集）「のこりなく有明の月のもるかげよりの〻おつるむげくれの花（山家）下「むげくれふちりとゞまれる花のこゝぞ忍ひ一人よあふこゝちする

むらま　袴（和名）十二十九　袴八賀万　大口袴（オホクチノハカマ）一云表袴奴（サシヌキハカマ）袴（カリギヌノハカマ）布衣袴云々　うへのきぬのむらま（源タゝね）五十さうぞくのむらま　うへのむ枕）七九　うへのきぬのむらま抄表袴（ウヘノハカマ）の事也云々

らま（枕）十十三　此藏人よりおれる鞠のれうのうへのむらま抄綾の表袴也（源ゝふひ）十浮（ウキ）もんのうへのむらま　おゝ童女髪ゆゝギの所おり（花鳥）云々今案童女晴時打袴の上表袴をれる云々よのつねゝ表袴不着云々　ひとへむらま（源タゝね）三　きおるそゝのひとへむらまこゝゝ童の服也（枕）二廿一　あをよびのさゝぬき白きむらまもそゝげおり云々ふたあゝの直衣おゝとさゝぬきこれそむうの御袴ゝ云々。指貫の下袴おるべゝとぞ（拾玉）四（夫）七「わらかへで青きひとへよりくれなゐの袴と見ゆる岩つゝゝ哉　むたむらま（盛衰）卅五七佐々木ゞ郎等よ常陸の國の住人かゝま興一とてぶさうの水鍊あり鎧ぬぎ置たゞばらまをかき腰よゝ鍊をさゝ手よゝくまでをもちて云々今のサルモヽヒキのたゞひおるべゝ

むらまぎ　着袴（源きりつゞ）五此をこ三つよおり給ふ年御袴着の事一の宮に奉りゝにおとらそ（狹）四下卅二二宮の御むらまはぎもこよひおりけれゞ是ゝ二歳の。袴の事委くゝ裝束御時おり。の諸抄を見るべし

むげこ　齦齒。俗ゐいふハギシリおり（和名）三十七　錄驗方云齦齒波賀美睡眠而齒相切有聲也云々。今も睡中ゐ去らそる人おり

むげこ　是ハ今もクヤシク殘念ゐ思ふ時ハギシリそる事おり（うつゐさゞの院）八十一宮たちもおゝせでいとようたむらりつべらりける物をとてむげこをゝゝて出ぬ補（万）九ノ卅六　牙（キカミ）喫たけびてむらゝ　太刀の事おり　御刀（ミハカシ）此云二彌波迦志一（枕）七三、關白のさま　御むらゝおどひきつくろひやそらゝせ給ふよ（源松風）十九昔よりあらため心ちよげよて御むらゝとりよりきたり（後拾）雜五　式部卿敦義親王生れて侍りけるよ御むらゝ奉るとてむそびつけて侍りける歌云々（源をつくゝ）十一、明石の姫君生れ給ふ所ゝ　御むらゝさるべき物おど所せき迄おゐゝやらぬくまおゝ（孟津）御守の御太刀也（榮つゐその花）四、皇女降誕の所ゝ　御むらゝいつゝらとも参れり例ゝ女よおむゝまそゐゝ御むらゝゝおきを云々是をむゞめたるためゝゐおりぬべゝ（河海）よ皇女の例ひきたるも此三條院皇女の御事なり（源タきり）五十八　御むらゝよそへて經箱をそへたるゲ御らたむらもおれ孫ゞ（細流）女も守りよ持たる也

むげひ　羽交。万の鳥に羽を打ちがへたる所をいふなり（万）一ノ廿六　「あゝべゆく鴨の羽我比ゐ霜ふりて云々（散木）上七十四　「汐ゲまのけふりよまゲふ濱千鳥おのゲむゲひをおれぬとやなく（夫）十六俊成　「あゝゲものむゲひの霜やおきぬらんをのへの鐘もゐの聞ゆおり（同）廿五如願法師　「むゲの浦やよゝよ霜ふむあゝたづのむゲひの月をふく嵐らゐ

むらせ　博士（和名）五二博士波加世（職原抄）大學寮紀傳明經明法算道謂之四道云々文章博士紀傳道儒士云助教音博士云算博士算道之極官也云々又陰陽寮に陰陽博士暦博士天文博士漏剋博士などあり

もんざうむこのせ（源夕かを）四十九もんざうもかせめして願文つくらせ給ふ（令義解）三、廿五凡博士助教者皆取明經堪爲師者委くはその書わ衡ついてあるべし（後拾）匡「むらなくも思ひけるかあちもあくてむこのせけ家のめのとせんとは（源きりつぼ）廿二弁もいとさえかしこきむらせまていひかむしたる事どもあんいと興ありける（同さのき）五十年老たるむらせどもあど云々（同ゑゝき）十四馬のかゑ物定めのむらせまありて云々こゝはたとへて興わいへるなど補（紫日記）ふやのむらせ文屋

こよゑのむらせ　暦博士（源あふひ）十一髪そぎの所まけふはよき日あらんらしとて暦のむらせめをて時といせあどし給ふわどに

むらし　右わ同（榮初花）卅五御ふゑのむらしまは藏人弁廣業かうらんのもとまは立て史記の第一巻をそよむ

むらせ　羽風（古）春下そせい「木づたへいおけげ羽風まちる花をたれまおわせてこゝらあくらん（源あげまき）十五むら鳥の立まよふ羽風ちらう聞ゆ（永久）仙宮、兼昌「のりてゆく鶴の羽風まは雲もれて月もさやけくをむ山べらあ蚊のむらせ（枕）二、八蚊のわを聲まは名のりて顔のもとまとびありく羽風さへ身のわどまあるこをいとまくけれ

むらせ　葉風（千）秋上、侍從のめのと「秋たつと聞つるらまわど宿の荻のむらせの吹らへるらん（季吟本）補（玉葉）春上貞時「窓ちらき竹の葉風も春めきてちよの聲あるやどのうぐひを（同）夏、大僧正行尊「水無月のてる日といへどわげやどのならの葉風へをゞしのりけり

むらぎ　羽數（長秋詠藻）中「あもでのこふしまこの里またつ鳴のむかはにおつるさど涙らあ鳴のはねらく數のおわきわよそへたる也

むらぎ　葉數（千）賀孝善「君げ代わくらべていもゞ松山の松のむらぎへをくあらりけり（風雅）春上能宣「皆人の手でとまひける松のむものむらぎを君がよへひとへせん

むらを　化をもげさる　あど次の　をけ　の所わ附を

むた　機（和名）十四機國語注云織設經緯以機成繒布也漢語抄云高機多加波太（神功紀）一千繒高機（神代紀）下廿一手玉玲瓏織紝之少女者是誰之子女耶（万）七廿一「そとめらげおる機のうへを眞櫛もてかゞげたく島波間より見ゆ（後撰）羈旅、菅原右大臣「水引の白糸もへてれるむたを旅の衣またちやかさねん（新六帖）五信實「山賤のをさをあらゝのむたあれど音へまどわわ聞えやへをる

むたどの　殿也（神代紀）上廿七居齋服殿（同）卅日神居織殿

むたもの　機物の意にてたゞむたといへるわ同（万）七廿九まげ二十物の白麻衣（後撰）秋下貫之「から衣たつ

たの山のもとちもいたた物もおきにしきありけり

たたものゝふとき（万）十卅「機の蹋木（ハタモノ、フミキ）もちゆきて天の川打橋とたを君がこんため」あ

さたた　あの部　たづたた　あの部　わ出そ

たた　幡（和名）十三征戰具　考工記云幡波太旌旗之總名也（神代紀）上十一　幡旗（古事）下十八　波多（ハタ）もりたてたたあし（和名）十三旒波多阿之旌旗之末垂者也　たたゐこ（文選）西京賦　烏獲扛鼎（チノ）都盧尋（抑ポリハタホコノ）撞（同）撞（ハタホコノ）末之伎能云々

たた　幡（和名）十三伽藍具　涅槃經云諸香木上懸（ニ）五色幡（和名）波太（源そゝむし）初　たたのさきあどかつらう心ことあるからの錦をえらびぬもせ給へり　たたゐこ（和名）十三

寶幢（ハタホコ）、花嚴經偈云寶幢諸幡（ハタホコ）蓋（万）十六廿四「婆ら門のつくれる小田をもむ烏まあふたもれて幡幢（ハタホコ）ふをり

たた　畠（拾）雜春　でんぐうち侍りける時ふもたたやき侍りけるを見て云々長能「かた山よもたやくをのこかのこめるこやまさくらいよぎてもたたやけ

たたけ　たけも同（和名）十一畠、續捜神紀云江南畠種豆、畠一曰陸田（八多介）　たたつ物　つゝ助字

な（神代紀）上廿　陸田（ハタツモノ）種子（万）十八卅二　うゑ〜田もまき〜波多（ハタ）氣も云々（宇治拾）十三二　たたけ

ふも作らるまゝ家もえたつまゝ　たたけ芹（新六帖）芹知家「いたづらまあるゝそのふ

のたたけせりとびしげふてもある世ありけり　藍たたけ（同）あね信實「もりまあるをりま

につくるあるもたけいつああげちのこぞめをりこん

たたたけ　田と畠也（うつゐたゝこそ）七こくしげの物さていたたけかりつくして數

らずつりひ給へば（宇治拾）四、六田もたけもおゐく作りて

たた　鰭　又　ひれ　ともひ（神代紀）上廿　鰭廣鰭（ハタノヒロモノ）狹（ノサキモノ）（文選）上林賦　捷（アタ）鰭（ハタチ）掉（ウゴカシチ）尾（和名）十九八　文選

注云鰭音耆和名波太俗云比禮　魚背上鬣也

たた　端　俗はいフチをいへりたしの事なり　つきのもた（和名）十六七　切韻云甑俗語云、都岐乃波太　器緣謂口邊也

火桶のもた（枕）二、六老をこうたてあるものこそひをけのもたゐ足をさへもたげて云々

舟のもた　又ふあはた　ともいへり（枕）十二、四、蜜のさまふねのもたをおさへてもあちたる息あど

こそ云々（狹）三上三　あかめ入りて舟のもたよりかゝりつゝねふり給へる御まこの云々

補（宇治拾）十三大ある川のもた茂めくよ（著聞）九　堀のもた

たた　將、又の意也あるひと云々モ又と　モ文字をそへて譯をべきあり（欽明紀）卅四　爲當（ハタ）と点したりその余爲當の字をよめる他書わも多し（万）

十六廿八わ　將見（ハタミテン）とあり、今迄と同くヤツハリ又の意。是も又とおらべていへる意。ソレ　ハカリヂヤナイとあるゞ上ゐ又の意あるもあり。是迄とカハッテ別段

ある意もあり。ヤツハリ又の意ゐサスガニと含めたるありカハッテ又の意より

ナゼニと含めたるあり、くさ〳〵のやうあれど、もとの意い皆同し味ひてしるべし

（源とつね）十一その外の心もとなくさびしき事たちかければ又トの意あり（うつゝとゝ
け）親の御爲はさるげんの母といもれ給もん事と思ひまゝてよき事もたかさりる
べゝ（ソノ上ヨキヿモ又の意あり）（同）北方の事を只今さりはて云々光りをもあつやうに見え給ふ子もた
更はもいもぎ此世の人はも似ぎ（子モ又同ノの意也）（同たゝこそ）さぐ身のあらんをもゝらは
つゝまつらん人のあらんもたゝらぎ（源とゝきゝ）廿七これもたえゝも思ひもあをぎ
（カレモ又あり）補（万）十八九「たこのさきこのくれゝしげはるゝとゝぎをきどよめばはたこ
ひめやも（同）十五卅三「いのちあらもあふことともならんとがぬるもさおおもひそい
のちだはへば（神樂）早歌本やさぎのくびとろんと来やいともさあげうて（兼輔）「あ
をゝらぬ物とゝる〳〵さくら花ちらぬかぎりゝ見まくをゝもさ（後撰）秋上よみ人ゝらす「
秋風のふけをさをぐはさびゝもさよのことさりをおもふものゝら（伊勢物）二日
といふ夜男されてあもんといふ女ももたあもトともおへらを（枕）五廿三人もささ
ゝてえさらん人こそゝらめとてやさぬ（同）八十五いゝでさもさおもひまうけたるや
うゐの給ひけん（拾遺）雜春元輔「春ゝをゝゝとゝぎをもたきりまゝゝおもひさづらふゝ
づ心ゝゐ（後拾遺）春下花山院御製「三千世へてありけるものをおどてゝゝゐもゝとゝゝ
さおづけをめけん（拾遺）雜賀好古「もゝゝきゐちとせの事ゝおをゝれどけふのきさも

さめづらゝきかゐ（万代）能因「そむけどもそむられぬもさ身ありけり心の外はうき
世おけをゝ（もさや）（万）一廿八「さよゝの、山下風のさむけくゐ爲當也（ハタヤ）こよひもわをひ
とり寢ん（又モヤヤッ）（もたやもた）（又モヤ又モ此上ニモ又ヅロヤの意也）（万）十六廿三「やせ〳〵もいけらばあ
らんをもたやはたむぎをとると川は流るゐ（いつもた）（イッ又あり是迄ト（チガウテ又の意也）（拾）物名「
ゐき色ゝいつもたうをくうつろゝん花は心もつけざらんゝも（かくもた）（カウモ又あり）（源
とゝきゝ）十二云々もひゝくれぬゝゝ云々十三やゞて尼ゐありぬゝゝ云々いでゐあゝゝ
かくもたおゞゝゐりゐけるよ云々。こゝゝカウ迄モソノ上ニ又の意あり（今もた）（後撰）戀五、もとよ（拾）
戀二「さびぬれも今もたおゐ難波ゐる身をつくゝてもあもんとぞ思ふ（源きりつゐ）
十九此御事ゐふれたる事をも道理をも失ゝせ給ひ今もたかく世の中の事をもおゞゝ
をもたるやうゐおりもくゝ云々。今モ又ゐてこれらハヤッハリの意あり補（新古）戀二攝政太政大臣「あげゝすよ
今もたおゐゞおとり川瀬々のうもれ木くちもてぬとも（新勅）秋上爲家「音たて、今も
た吹ぬさゞやどの荻の上葉の秋のはつ風（新拾）戀四攝政村「あもでこそ戀をいのりとたの
ゝゝゝ今もた何ゝいのちあるべき（万代）「白妙ゐ色ゝ見もれど梅の花香ゝもた袖
ゐゝゝぬべきゝゐ（又もた）（たゞもたとのゝいへるゐ同サウハカリデナイ、ソシテ又の意あり）（かけろふ日記）中下六、女君のこもりゐ
給ふ所ゐ　こたゝさへれりぎゝいとつべたまゝきさまにあん世人も思もんまゝもた世

ゐ物〜給へど殿モ又御ムカヘノコハモ・ハヤ思召スマジの意也　[むた]是ハ皆云々なれどもサスガニヤツハリソレモ又の意あり（ひゝ紫）のものの意を含めたるあり（万）十一五「世の中ハ常ゝくのごと思へどもむた忘られぬ猶戀ひゐけり（躬恒）卅八火箸を「冬をきもをゆけおられゐん物ゆゑゐ物ナガラ也君ゞ手ゐむたゐる、べらゐり（いせ物）四十二段色好ごとゐる〜女をあひいへりけりされどゐく、むたゐりけりコク、モ又也（拾）別もけの「よゝとき「思ひ出もゐき故郷の山ゐれどかくれゆくむた哀れゐりけりカクレユクモ又也（源ひゝ紫）三十藤つぼの孕ませ給へる所ゐをこゝふくらゝまり給ひて打ゐやゑおもやせ給へるむた似る物ゐくめでたゝナヤミ玉〜ルモ又ゐり・[むた]是ハナセニ又の意ゐるへゝ（古）裏そせい「ゐとゝぎをゐく聲きけゞ▲あぢきゐくぬゝさだまらぬ戀せらるむゝ（後撰）戀一、桂のゑこ「から衣きてかへりゐゝ小夜をゞら哀れと思ふを▲うらむらんむた。（アユイ抄）ゐ是らんむやと打ゐげく詞ゐゆ似たれゞ里言ゐゆ又何トセウといふ詞ゐやと見ゆといへり又（宣長ゲ遠かゞゑ）ゐ郭公のゐくゝ面白けれどゆ又云々の意ゐり　と譯ゝたり。今案ゆるゐ下のむたを上の▲のゐるゝの所へうつゝて譯をべき事ゝ宣長ゲいへるごとゝ。さて（順）廿三「たれよりいのるせいゝらでの意をそへて譯をれゞいづれも聞えやゆくや　ゞゐゆあらゐくゝ▲あさくいひゐを大ぬさよむた（源ゐふひ）廿二。葵の上子うまかせ給ふ所ゐの御息所ゝかゝる御ありさまをきゝ給ひてゆたゞゐらゆ兼てゝいとあやふく聞えゝを▲平らゐゝをむゝと打れゞゝけりなやゑ給ふをこそよゝと思へナゼニ又平産ゐりゝと妬ゆゝう覺ゆゐり。ての

はた　眞淵の説ゐハタシテの意ゐりといへるゝ穩ゐらゆ。俗語ゐひゝ思ふやうゐらぬ事をナゼ又カウダラウといへるゐ語意同

補　[むゝ]發聲のさまをいふ（宇治）三をこゝゝのめゆこのきて經をむたと打あけてよゝたりけり

[むた]（宇治）三ノ八湯ふねゝゝらをこゝまゝ〜ときりて一むたいれて此むた尙可考

[むたかくるれ]几帳ゐゆたゞ万物ゐ隱るゝゐゆいへり。ト（遊仙）六見二十娘半面ハダカクレクルヲハイヘド又ゐてさゆがゐ殘らずゝ隱れぬ意也（かけろふ日記）中下七　こたゝゝつゝむ事ゐくさゝゐゆこたゞいりゐいをゞわびて几帳をかりを引よせてむたかくるれど何のゝひゐゝ（源ひゝな）上八十八えゝもひきかくさで御几帳をそこゝ引よせてゝづゝのらゝゝむたかくれ給へり（同まきゝら）五をこゝおきあゞり給ひて御几帳ゐむゝかくきておもす（同松ゝせ）十九ゐぶ〜ゐるさり出て几帳ゝむた隱れたるかゝはらめいゝどうゐまめいて（宇治大納言物語）入り給へれゆ几帳の内ゝむゝ隱れてゐたり（檜垣嫗集）ひゞきゐりと人のいへゞむたかくる、によびいづ（濱松）一をこゝむたかくきゐゝる所ゝ（小町集）十九「ゐどけゐき紅くたれ髮を見せゞとやむたゝくれたるけさの朝ゝ不（千）えいゝい江侍從「夏の内ゝむたかくれてゐあらゞゝておりゝちゝけるゝ虫のこゑゝゐ（枕）三十一郭公ゝ云々歌ゝ卯の花花橘ゐどゝやどりをゝてむた隱きゝるゆ紅たげゐる心をへゐり

[むたさむゝ]七八月の頃風のひやゝかゐるをいふ。トハイヘド又さゆゞに殊の外の寒さゐゝゐらぬ意ゐり（好忠）七月「朝ぼら

け荻の上葉の露見れもや、もたさむ〜秋の初風まだ七月あれば（源きりつぼ）十野分だちて俄ょもた寒き夕ぐれ（同玉かつら）廿九秋風谷よりたるかょ吹のぞりていと
もたさむきょ（同よこふえ）十もね打かもも雁ゲねも云々風のもたさむく物哀きお
るょ補（續拾）旅成茂「朝霧のたちょ〜日より旅ころもや、もたさむく雁もおくあり
（万代）「秋風のや、もたさむき時〜もあれうづらおくありをの、〜の原
もた二十。そへていひつゞけていふょい（源うつせみ）五十もた三十よそおどかぞふ
もたちをもぶきてもたといへり
るさまもた巻（古今序）もたとせ廿年（玉かつら）廿。万ぶ〜てるべ〜
もた肌。はだもはだへも同一事と聞ゆ、支体又紙ょもい（和名）い肌如波倍膚肉也と別
へり、檜皮をひはだといへるも同一意あるべ〜
ょ出〜（古事）中五十五波陀ありらけ云々夜いた部よのありいた部あの部ょ出そ（古語拾遺）絹を貢〜
たり
たる秦氏の事をい所貢絹綿軟於肌膚故訓秦字謂之波陀（ハダ）とそえより
へる所の自注ょ
もたさむ〜（万）廿廿三「旅衣やつきかさねていぬれども猶もさ寒〜妹ょ〜あらねも
もた（源梅かえ）十六てまの紙のもさこまりょおがろかつかーきゲ
もたふる肌觸と同今（古事）下十五ょてそ昨夜こそやそく波娜布（ハダフ）例（レ）とあるもはだふるもたふれ
（梁塵愚按抄）十二神樂歌「さぎもこよや一夜もたふれあひそあやまりに〜より云々（散木）
中五十三たゲひてあいぎといへる事を「玉ゆかりのおまーのそ〜はもさふれて心いぎ

ぬ君おけれども（万）十一「ありらひくもたもふれぎて寐たれども心
ょことょこゲ思いおくに人もたふる（永久）衾仲實「あせいらぐうをたくせこい思も
ド や人もたふるなまたらをおもま猶ゆの部ょも出そ
もたつき顔つき口つきな（源ゆかり紫冊ぞのつきょ同九）わが君いの紫の上の事也いとれそろ〜ういかおらん
とこあ、かれていとうつく〜き御もたつきもそぐろさむげょおぞ〜たるを（同さ
かき）五十うを物の直衣ひとへを着給へるょをき給へるもたつきま〜ていこどうこ
めるを源の事也（同とこ夏）十六うを物のひとへを着給ひて云々をき給へるもたつきもいと
うつく〜（狹）二上十二あるかょをかーげおる御身おりもたつきおど
もたへもざ同（和名）三、九膚波太倍體肌也（つれ〜）八段手足もたへおどのきよらかょこえ
あふらつきたらんい補（好忠）「夜いさむ〜ねとこいうを〜ふるさとの妹ゲもたへ
いいなぞこひ〜き（同）「さよあかおせこゲきたらぐさむくとおもざへをちかこ袖も
へたてド いろもざへ色とそざへ也（狹）一上十三色々の紙の色もさへ
もたいた（和名）十五、十五板薄木也功程式有二波多板歩板一（枕）八四名れそそ〜き物、もたいた抄鰭板
家の具也（沙石集）三上廿一人の家のもた板いの内見ぐる〜き事かくさん爲おるょ泰村ゲ家の
もた板いの内迄見え通れりとそ仰ありつれと云々

たたばり　体の詞也。白文に點したる如く（白文）十四四 満幅風生秋水紋（拾）秋観敎 幅の字にたゞの事なるへし

「水うゝ〻ゐ秋の山べをうつしていもたたばりひろき錦とぞこそる（新六帖）五信實「世の中

ようきぬれ衣のもたたりいのべもおゞめもせられやいせん 補（職人盡歌合）おろぬ

のめせおうもたたりもしやくもよく候ぞ たたりたる（枕）六廿 青にひのさしぬきの

もたばりたる句 白ききぬともあまを着て抄 ひろでりたる意也

たたし（和名）十九十七 蝦蟆 笑赤二音波太々々 本草云貌似蛙蟆而長細色黄飛時作聲在荒田野

者也 俗ゐいふギャ〜バッタおりとぞ

たたし 物の音也今いニゴリテばたたしといへり（かけろふ日記）上下十一 あまといふ物心こるを又晝より

どゐ〜〜たた〜〜とそるぞ云々（いゐぬし）ひのきを人のたくげもしりもためくぞ云々 此

山いゐたくひ驗ありてもた〜〜と申をといへを（宇治拾）二十七戸をもた〜〜とたゝけ

るゐ 補（同）十四十一 牛の尻をもた〜〜とうちて

もたへ　もた 附を の所ゐ　もたもりを の所ゐ　もたどの　もた 機の所ゐ共ゐ已ゐ出を

もたと　もたも物の音ゐて俗ゐいふバッタリトなり　もたと落を（落くゐ）二扇をさしやりてかうふりをも

たと打おとしつ（同）同 いさりひをけるゐどゐ一の車のとこしやりをふつ〜〜とき

りてけれゞ大路おりゐもたと引おとしつ 補（著聞）十四三 御手をもたとうたせ給ひて

もたと鳴る（宇治拾）十二八 僧正項より黑烟を出して加持し給ふゐをゞらくありてを

がれる臂もたとおりてのびぬ

もたち　二十。ゐとゐ（狹）一上五 もたちゐ今二つもりや足り給もざらん　もたちあまり

（宇治拾）四六 廿あまり三十ゞりの女

もたち　是い物の數の二十をいへり（いせ物）九段 比えの山をもたちゞのりかさ糸あげたらんゐどし

て（うつゐ祭の使）五 せんりうのをしきもたちづゝ例のごとして（同吹上）下廿四 もた

んのをしれもたち　もたちあまり五つの姿 廿五の菩薩をいふ（玉）釋教爲子「紫の霞たなびきても

たちあまりいつゝの姿まち見てしを哉

もたる　今と同（神代紀）上廿九 遂促徵矣（白文）一五 有吏徵粟（同）同卅 責其秡具　もたちば

（万）十六廿二「たんをちやをりもおいひそてこらゐげえたをもたらばおれもおりらりも

もたり　裸（榮根合）卅四 をまひおども清涼殿ゐて中宮い御覽ぜぎしきありさまさる方

ゐ見所ありもたりおる姿どものおもたちたるぞうとましりける（宇治拾）十二十三「

もたりおるゐが身ゐりゝる白雪い打もらへどもきえせざりけり 補（宇治）一 もたり

ゐおしてあさらんゐい（同）十二 まもたりゐてたうさきもりをして もたりつるいぎ

（うつゐくら開）中十四 もたりつるもぎよてもしらせ給ひて

[むだらる][目口むだらる]（おどろきあきれたるさまをいふ。むだらるの意俗よ同〜）を見るよ落くぞの手あれば目口もむだかりぬ（宇治拾）十二九　これをきくわあさまし〜く目口むさらりて覺め

補 [むたゝく]（竹取）六月のてりむたゝくわもさいらき來よけり、大秀解云、照むたゝくい本居翁の云く照霆（テリハタヽク）あり（万葉）十九わ光神鳴波多（ヒカルカミナリハタヽ）嬬（ナトメ）とあるも冠辞より受たるい鳴むたゝくと受さるありと云れき字書に霆雷餘聲也又霹靂也まさ或書わ霹靂をハタヽガミナリト訓り字鏡わ礌磈（ラウガイハ）石聲止々呂久又奈留又（カツハ）韜聲波比々佐久又波多々久　鬪多女久とあるい雷聲わいあらねと聲（コエ）を形容（カタドリ）し波多（ハタ）と云る同例あり云々

[むたゝき]（ハフリテ）翡翠（ハタヽキメ）[むふく]の所見るへし

[むだれ]（袖中抄）五　雪といいねどたゞむだれとよこてもむたら雪と聞める也（万）八十六二　「笹の葉わ薄太禮（ハダレ）ふりおわひけあばいらもさそれんといへばまし〜て思わめ是ちハタレとのこいへど雪のこと也（同）十九九　「さゞ園のそも、の花ゝ庭わちる波太禮（ハダレ）のいまだのこりたるゝも。今案そるよハダレハハタラわ同くマダラの色わよめり 補（万）九十二　「さけむゝふこあぶ意あり・俊頼朝臣の歌い紅葉の色わ同くマダラわ同くマダラの色わよめり 補（万）九十二　「さけむゝふこあぶち山のいむそわいふれるむだれゝきえのこりたる（頼政）「むだれ雪ふるゝと見れも九重わちりかさあれる花わぞありける（万代）俊成　「風さゞぐさよのねざめのさび

しさいむだれ〜もふりたづさむわあく（風雅）秋上　基俊　「風さむこむざれ〜もふる秋のよい山〜たとよこ鹿ぞあくある（平家物語）雪いむざれわふつたりけりかれのゝけ〜きまおとわおもゝろかりけれむ[むだれわふる]（万）八十四　「沫雪ゲむざれわふると見る迄わ云々（古）長歌貫之（六帖）四　時雨〜て冬の夜の庭もむざれわふる雪の云々[むだれ]雪（夫）十八主殿　「むだれ雪あだわもあらできえぬめり世わふることや物うかるらん

[むだれ霜]（万）十卅八　「あま雲のよそわ雁ゲね聞〜より薄垂霜ふり寒き此夜い（堀川）鹿基俊　「風寒こむだれ霜ふる秋の夜い山下とよこ鹿ぞあくある（夫）十四有家　「虫の音のよこるもゝる〜淺茅生わけさい寒けくむだれ〜もふる・（夫）廿ノ十五、さゞ　「時雨そるむだれの山いもこぢその色づくわどの名にこそありけれ

○[むだら]ばたれわ同[むざらは]（万）三十七　雪驪（ユキモハダラニ）（同）十六（續後撰）冬人丸　「夜さむこ朝戸をあけて出てこれい庭も薄太良（ハダラ）わこ雪ふりたり一云保（ホ）（續後）けさみれば（躬恒）四十四抒呂（ドロ）ゐ。雪ふりみけり　「春くれば吹風よさへ櫻花庭もむだらわ雪い降つゝ[むだら雪]（蜻蛉日記）下廿二　「いたうある、事あくてむだら雪ふたゝびもりぞふりつる（顯輔）「かるの池の入江をめぐるかも鳥のうむ毛むだらよおける朝露是いまだらの意あり 補（續後拾）春下兼盛　「さゝやどわ鶯いたくあくあるい庭もむだらよ花やちるらん

もたそで（孟津）鰭袖端袖 兩義也（源もそちのぐ）廿九わゲ御直衣よりハ色ふゥーと見給ふよもた袖もあゥりけり（盛衰）廿三維盛ハ赤地の錦の直衣よ大頸端袖ハ紺地の錦ゐてぞさゝれける、眞淵云万葉よ宮人の袖着衣とよそゝーは袖のあゲゝらんためよよき人ハ袖の端よ又着れハ端袖といふへゝ鰭の字ハ意むつこのゝーく聞ゆ 補（平家物）かちよあゥちのよゝきをもつてもたそでいろへたるひたゝれよもえぎよゐひのよろひきて（餝抄）小忌ノ條大袖摺之端袖小草計摺之（辨官抄）持笏事ト云條ノ中ニ以左手ニ引右袖鰭ヲ天云々（朝野群載）進退傳ニ取笏之後不顯両手左手之上覆其袖之端ヲ廣足云ハ此事ハ

もたつき 肌の所ゐ出も

かゝーの下枝ゐくもーくいへるを見るべー

もたつもり 令法。木の名なり（六帖）六下「もゲ戀ハを山よおふるもたつもりつもりゐけらー

あふよーもあー（永久）後頼「おく山の草ゲくれゐるもたつもりをられぬ戀よやまふまよふゝ頃哉（夫）廿九或人令法といふ物をおこせたるにかくいひやりける能因「今よりハもやまがくれのもたつもりもゲ打もらふ床の名あれや（新六帖）六、衣笠内大臣「さと人や若葉つむらんもたつもり外山も今ハ春めきまけり（同）知家「今よりハこのめもたるのもたつもり時來よけりと人やたづねん（同）光俊「ねやいらぬ外山の春のもたつも

り葉よのゝいで、人よおらる、 補 廣足云山茶おのれあまのくゝつゐも圖を出していひおけり

もたつもの 畠の所ゐ附も

もたらく 働 **生てもたらく**（うつそ國もつり）下十四鯛鯉ハいきてもたらくやうよておゐ作り枝よつけたり**唇もたらく**（宇治拾）十一十八何といふよゝくちひるもたらく**身をもたらさを**（同）六十一此二三日いさゝ身をもたらさを**尾もたらさん**（枕）十、三尾もたらさんをめ雌と知れといひけれを**かもねもたらき動く**（著聞）二十五聲をあげて加持をるにかもねもたらきうできておきあゲりて 補（宇治拾）またゝもたらゐ人のもたらけもたそと、へゝ（著聞）十六卅五さるゐつけてもいよ〳〵心のもたらく事ーづめゲたけれゝ（同）廿十七其中ゐへーこめてもたらゝぬやうよおーおゐひて

もたうつさを 端打棹 補（成道集）「河霧ハたちよけらーゐ高瀬舟もた打さをの音もかりーて

もたおるむー 機織虫、次のもたおりめよ同（拾）秋貫之「秋くれもたおる虫のあるゐへよから錦ゐもゝめるのべ哉（新六帖）六知家「草の庵よ今もた虫のおりかくる聲のあやゐくよと

る頃哉（同）同光俊「もそ野よいもたおる虫もいそくゐり山の錦のいろまさる頃

もたおりめ 促織。今ハタオリ又ハトゝともいへり（枕）三、十二、虫ハの所ゐもたおりとゐ（和名）十九十六絡緯一名

促織波太於里米鳴聲如急織機故以名之（六帖）六上　たた　おりめ　「雁ゐねの羽風をさむみたたおりめくたまくこゑのきをく」とあく補（新續古）十九　たたおりのあきけるをきいて頓阿法師　「秋のよゐ露よおりもへたあもたの手よもおとらぬ虫の聲ゐあ

もたけ　畠所ゟ附そ　はた　**もたふる**　はだ　ゟ出そ

もたけ　疥癩（和名）三廿二　内典云疥癩和名波太介

もたで　旅籠（和名）十四、行旅具ゟい　籠、唐韻云籠飼馬籠也、漢語抄云波太古俗用旅籠二字　ゐり今按そるにもとい馬と飼ふ籠の名のミゐてゐりしを轉して（兼盛）「旅人いそりも旅中の食物おとそべての雑物いれたる籠といへるおるへし

もたでもむあ〜きをもやくいまーね山のとねたち（うつを　吹上）下卅　もたでふたゐけゐ道のをどの物いれてよき馬よおをせたり（同）卅三　もたでをきもこさりこゑふくろ

（同）四十　ゐろゐねのもたでども補（同）廿八　〜ろゐねのもたでひとゐけ　造物おり

もたでどころ　旅籠所。旅中の荷物をとりおろ〜置又食物おどとりまたハむる所をいへるおるべ〜。今人やどそ所を旅籠屋といへるも万とり、まゐなふ所なれば（かけろふ日記）上下十六　もし〜寺といふ所よとゞまりぬ酉の時もゐりゐおりてやそをたれべもたで所とおを〜き方よりきりおをねも（契沖本）もの汁〜てあへ〜らひてまづ出〜たり

もたでうま　旅籠馬。右のもたでを負そる馬よて俗よ小荷駄といへる類ひおるべし（うつを　吹上）下四十四　ゐろゐねのもたで

馬ハ左大將殿よりでハ宮内卿よ（宇治拾）上十二、初瀬の所ゐ　侍おとあまた具〜てかちより参る女房の云々のどのゐりけも水のませよとて云々近く水やあるとさりぎもとむれど水もおー〜ハいゐゞせんそる御もたで馬よやもーあると問へハもるゐよおくれたりとて見えぎ云々十四　御もたで馬おど参りたらんよ物おど喰ひてまゐれと、へゞ承りぬとてゐたるほどよもたで馬かもで馬おどきつきたりおどかくもるかよおくれて馬ハ参るぞ御もたで馬おどハ常よさきだつこそよけれ補（うつを　吹上）上　おと、もたで馬をいとけうありと御覽ゞて

もたでのうま　右よ同（夫）廿七爲家「旅人のもたでの馬の行ぎりゐ夏野の草ををさめやハせぬ

もためく　もたく〜俗のバタ〜ゐ同く物の音也スルおり　**むーりもためく**（文選）吳都賦　雷硠ナリハタメイテ　**うちもためき**（盛衰）廿九　時を走りもためくをとりて**鳴りもためく**（文選）吳都賦　雷硠ナリハタメイテ　**うちもためき**（盛衰）廿九　時をつくり大鼓をうちをらをふき木のもとかやのもとをうちもためき云々

もたし　跣（字鏡）十八　跣波太（うつを　國もづり）下　中納言見つけて南のむ〜よりもたし

にておりおハ〜ておひつきて

もたーて　俗ゐ同物の必然るをいふ（神代紀）上卅五　果有大蛇（神武紀）十六　今果立忠効（宇治拾）四ノ十四　俗を生せ給ハゞ關白攝政をうませ給へ女を生せ給へ女御后を生せ給へ僧を

生せ給へゞ法務の大僧正を生せ給へといひ終りてそのち死ぬ其後此女房宇治殿より思もれ參らせてもたゝて京極大殿四條宮三井の覺圓座主をうゝ奉れりとぞ（此詞物語）

ぶゝわゝをさゝ（見及）ばゞ（著聞）おどろ多ゝ（一十五）此宣命必神感あるべきよゝ自讃せられけるゝもたゝて三日雨おびたゞゝくふりたりけるとかん

補 もたゞね（俗ハ云所）（字鏡）纏殘纏織餘也、志禰糸

もたもの（機）もた（の所ハ出モ）

もたも（果モ。俗と同）もたゝ（文德實錄）十三如御意爾果之幸倍賜比（三代實錄）卅八今畏岐本御意早果行倍岐物奈利止仰給不御命毋安利もたゝ給ふ（源ゝをつくゝ）廿一願どももたゝ給ふべければ（同ゝゝ）二八十一ねゞひゝち給へん世よ住吉の御社をもゞめもたゝ申給へもたゝよ（同ゝをつくゝ）廿二內の大殿の御願もたゝよまうで給ふを補（落くゝ）一此殿ふるき御願もたゝハ石山よまうで給ふもたさせ給ふ（狹）四上九いついらゝあり御願どももたさせ給ふハらと御社の神人ども驚くハもたさん（いせ物）八十六段猶心ざゝもたさんとや思ひけん男歌をかんよゝてやれりけるもたさゞ（万）三、五十九長歌むそびてゝ事ハ不果思へりゝ思ハ不遂もつ もつる もてん もて など別よ出すもたもゝき（穗ハ出て打おびきたるゞ旗に似ればハや又穗を皮ハ含ゝて漸ハ開出れば膚の意ハてもだもゝきハもやといへり（神功紀）一幡

荻穗出吾也（万）一、廿一長歌あさの大野よ旗須爲寸ものをおゝかゝ云々（同）十四廿六「よひむろのこどきよいたれハ波太もゝきハでゝきゝゞ見えぬ此でろ（同）十、五十五「さぎもてよあふ坂山の皮爲酢寸ハハハさき出ゞ戀ゞたるらも此集ハ猶多ゝ。古今集以來ハ花もゝきとハよまゞおれり万葉ハ花もゝきとよめるハ八の四十七ハたゞ一首ありといへり補（古史傳）十六波多須々支も花薄よて云々波那を波多とも云るあり廣足云、されどそハ言の趣ハ依ことハこそあれ常ハ打幡まろせて花を波多と云ことハ無きあり其ハ神功紀ハ幡荻穗出吾也云々、万葉八ハ波奈須爲寸穗出秋乃云々、十四ハ波太須酒伎穗爾氏之伎美云々、おどあるハて知るべゝもれ（晴。体の詞也（源ゝま）四十九云々）とてる給へるさまさるもれよ出ていふよゝかく見え給ふ（新六帖）五、さや知家「つゞ祭りけふをもれとも見せざやのさきをりかけてねるやたゞこぞ補（著聞）七草の字の額をもれの門ようたれたりけり（同）十六おのづゝらもれよてはこれハ人まへぞゝと思ふ心候てもれの歌（井蛙抄）十六、常磐井入道相國實氏

老後のもれの歌也心の及ふ所執ゝてよむべゝ云々と被申けりもれ間（晴せ）ぬもれたる（腫）もれる（張れる。これらのたゞひ巳ハはるの所ハ出モ）もれ〳〵〳〵く（氣の晴れてサッパリトスルをいへり又サッパリシタ氣マヘヂヤといふ所ハもいへり）（源ゝひゝもと）廿六、大君の父の服ハて月日のかげハ御心もてもれ〳〵〳〵くもて出させ給ハゞこそ罪も侍らめもれ〳〵〳〵う同さゝき）十六登花殿のうもれたりつるよ勺もれ〳〵〳〵うありて女房おども數しらゞ

つどひ参りて(同紅さい)三あまくねゞ〜しき事も出くる時々あれど北の方(まゝ母也)いと
もれゞ〜う今めきたる人ゝて罪おくとりあゝるが御方ざまゝくるゝかるべき事
をもあたらゝゝ聞あゝ思ひ直ゝ給へゞ(もれ〜からで)(同うそくも)十七もれゞ〜
からで月でろ過させ給ふ事さゝあげきゝたり侍りつるに(もれゞ〜からぬ)(同夢の
うきゝ〜)十八いとゞもれゞ〜からぬ心ゝいひやるべき方もあゝ(もれゞ〜き)(同藤
のうらゝ)十九さまゞ〜うき身と思ひくゝつる命ものべまそゝうもれゞ〜きゝつけて
(もれらゝ)(つれゞ〜)百七十五段女ゝ額髪もれらゝゝりきやりまもゆらぎ顔うちさゝ
げて云々。是も同意あり

(もつ)果。万ゐいへり年月四時ゐもいへり(もつる)(うつゐ吹上)上廿三「長月はいむゝつけてもなぐさめ
つ秋もつるゝぞかあゝゝりける(後拾)春下義孝「のべ見れもやよひの月のもつる迄ま
さうらゝゝきさいたづま哉(枕)二、三除目ゝ云々もつる曉迄云々(もつらん)(夫)九「と
きゝ山梢にもぞくうつせゝの聲の中ゝや夏ゝもつらん(もてぬ)畢ぬあり(新勅)春下貫之「ち
りぬともありとたのまん櫻花春ゝもてぬとこれゝおらもを(源かけろふ)十いとも
ゝおくて煙ゝもてぬ(もてゝ)(土佐日記)ある人あゞたの四とせいつとせもて、(かけ
ろふ日記)中ノ中十事もて、(同)上廿二四十九日などもて、(同)上ノ下一服もて、とありつれゞ

(もてゝける)(源もゝちのゞ)廿二うへの御けづりぐ〜ゝさふらひけるをもてゝけれゞ
(もてん)(同ゝ〜ひめ)廿一御山でもりもて侍らん
(もて)体の語二様あり又(もての春)(もての月)のたぐひあり此餘もそべて又(もて〜)(もてあき)のたぐひ次ゝ別ゝ出もを
(もつ)果。是ゝ万の詞をそへていへるたぐひそへたる詞の部ゝも出一つ大方ゝ例してゝるべ(うとゝもつまゞ)(源タゝ
ゞ)四十九えうとゝもつまゞきさまゝ〜たり〜哉(くれもつる)(かけろふ日記)下ノ上五く
れもつる迄あゞめくら〜つ(入りもて、)(枕)一日いりもて、(思ひもてたり)(源はゝ
きゝ)四十九むゞんゝ心づきおくてやゝおんと思ひもてたりたえもてゝたり(同ゝ
ゝ紫)廿ひとくざりの御かへりのたまさゝおりゝも絶もてゝたり(のりもてん)(か
けろふ日記)上ノ下一車ゝのりもてんを見んゝ(いひもてゞ)(夫)廿四「いおゞ川いおゝ〜つ
ひゝいひもてゞあゞれて世々ゝもまゞとぞ思ふ(そぐしもてぎ)(源末つむ)初さて
〜もそぐ〜もてぎおでりおくくづれて(おりもて給ふ)(同さゝき)初おりもて給ひ
ぬれゞ(見給ひもてぎ)(同きゝつは)十二歌云々とあれどえ見給ひもてぎ(怠りもてさせ給
ふ)(同ておらひ)五十五姫宮おこたりもてさせ給ひて僧都ものゞり給ひぬ(あらもゝ〜も
て侍らぎ)(同ゝゝ紫)廿五思ひ給ふるさまをもえあらい〜もて侍らぎおりゝ〜を(いひ
ももてぎ)(同はゝきゝ)廿いゝおることつけぞやといひもてぎもゝ〜り出侍りぬるゝ

間ひもてぬ（枕）四廿一云々　ゝと間ひもてぬゝ承りもてぬ（源きりつゞ）十二うけたまもりもてぬやうゝてゝあんまりで侍りぬるとて云々。たゞもつとのゝいへるも是も動ゝいふ詞同例なり

補　もつ果（新古）母の身まもりけるをさゞのゝとりゝをさめ侍ける夜よゝける俊成卿女「今ゝさゝうき世のさゞれ野へをこそ露きえもてゝ跡とゝのもめ（美濃家裏）云々きえもてゝといふゝたゞ消ゝといふとゝことゝなりこゝゝまてゝゝ母の身まもられゝゝゞ消たるゝてそのあきらをたゝとゞめゝをさめたるゞきえもてゝゝありをべて今の世の歌人ゝもてゝもつるといふ詞を何心なくゝさりゝをへてよむゝひゞことゝなゝ（尾張家苞）云　もてゝもつるゝかぎらゝ何詞ゝてもゝさりゝよゝてゝゝをろゝるべゝ母の身まもられゝゞきえたるゝてそのあきからをさゝとゞめゝをさめたるゞきえもてゝゝありといもるれと身まもられていまさ葬らゝとも蘇生だゝせられゝゝ消果ゝともあどゝいもざらん（貫之）「咲かぎりちらでもてぬる草の花うべゝも千世のよもひのぶらん（新古）雑中雅經「影やどを露のみゝけくゝありもて、草ゝやつる、故郷の月（新勅）冬前大僧正慈圓「こゝやま木の殘りもてたる梢よりあゝゝぐる、ゝあらゝなりけり（續千）雑上元輔「風もやゝ秋もてがたの葛の葉のうらみつ、のゝ世をもふるゝあ（同）同孝標女「いづくゝゝもおとらゞものをゝゞやどのゝをあきもつるけゝきもゝりは

もつ初　初春　初花あど仮字の順わ出ゝつゝされど猶もらゝつるも多ゝるべゝ　初鳥　初ゝらび　初櫻あど（八雲御抄）わ見も

もづ耻　もづる（古）戀四いせ「夢ゝさゝ見ゆとゝ見えゞ朝あゝゝゝさゞおもゝけゝもづる身あれも（枕）三十八かうかたらふとあらゞ何ゝもづる　もぢて（源ゝゝ紫）五十一かきそこあひつとゝもぢてかくゝ給ふを　もぢぞ（同ゝをつくゝ）五ゝろ髪をもぢぞ出つゝへけるをこそまことのひゞりゝゝけれ　もぢかもれ（いせ物）廿三段男も女ももぢかもゝてありけれど（枕）四一おあゞ所ゝをむ人のかたゝゝもぢかゝゝゝいさゝゝのひまあく用意ゝたりと思ふゞ云々　もぢかゝこまる（うつゞ吹上）上九それと思へどもぢかゝまりゝをおゞゝて云々ゝゝらぬやうゝてさふらひ給ふ（同）同十世ゝ侍りけると聞召されゞと限りあくもぢかゝこまり侍りゝかゞ今ゝ奏せゞ侍りつる　もちかゝやゝん（源タゝゞ）十九中〜もぢかゝやゝんよりゝ罪ゆるされてゞ見えけるかゝやゝんもむづる事あり　もぢかくる（枕）末いつゝゝゝそれをもぢ隠れたりゝ是ゝもぢてかくるゝ也　もぢかくる

○猶加の部見合もべゝ　耻の隠るゝ也已ゝ出もカムあり　もぢらふ俗のハニ（源まつ風）十七をさあきまゝちゝをこゝもぢらひたりゝがやう〜打とけて物いひ笑ひあど〜てむつれ給ふを（同末つむ）廿六いたうもぢらひて口おゞひゝ給へるさまさへひあびふるめゝゝう云々　もぢゝむ　むる（同まきもゝゝら）十ゝづからをゞけたりひゞ〜〜との給ひもぢゝむるゝことゝりある事ゝ

あん　もぢ〜め（著聞）一廿四　此事をときまへぞ〜てさりまわれを恨むるおろかありとも　もぢ〜め給ふと見てさめまけり

もぢ　耻、体の詞　耻をもつる　耻がま〜　のたぐひわさたそでわ出も　もづら〜　もづら〜ゆ　もづら〜む　これら各次わ出も

もつもる　初春（万）廿、五十八「始春のもつねのけふの玉もゝき手まとるこらまゆらぐ玉の緒（夫）一、元日、光明寺入道「初春の花の都まに松をうゑて民の戸とめる千代ぞ〜らるゝ

もつもるりせ　初春風（月清）上「落たぎつ岩間打出る初瀬川初春風や氷とくらん

もつ〜〜　小端。もつりわ同く危くとづりわ及び得たる事おゝとぞを俗わハッ〜といへるわ意おおゝ　もつ〜〜に（万）七、廿九「この山のもとぢのをたの花をとゞ小端まに見てかへるこひしゝも（同）十一、（六帖）五上、とゞめてわへる「山のもとさ〜出る月の端〜わ妹（六）君そゞ見つる戀〜き迄わ（同）十四卅「くべで〜まに麥もむうまの端都〜まあひ見〜こら〜あやまかあ〜も（堀川）仲實「石ふまのけふのせを布もつ〜〜まあひまても猶ありぬけさ哉（夫）四匡房「やを川のとたりゝ櫻もつ〜〜まに見をどもありを垣で〜わ〜て（同）廿二光俊「長沼の野を朝ゆけを山でえまに甲斐の白根ゝもつ〜〜まをゆ　もつ〜〜の（同）一仲正「もつ〜〜の若菜をつむとあさる間まに野中の雪ゝむらぎえまけり　補（万）四、四十六「波都波都まに人をあひ見ていりあらむいづれの日まり又よそまをん（万代）「山のもまもつりの月のもつ〜〜まに見〜ばりまやか

くゝこひ〜き

もつもあ　初花（古）春上當純「谷風まとくる氷のひまでとまうち出る浪や春の初花（源かけろふ）三十朝夕日なれても猶今見ん初花のさま〜給へるまに云々（金）夏盛房「夏山の青葉まドりのおそ櫻初花よりゆめづら〜き哉（同）春公實「朝戸明て春の梢の雪見れば初花とゆやいふべりるらん　梅のもつ花（万）十、六十一（後撰）春上「きて見べき人もあらなくまに（後）ドあわぎへある（後）ゞが宿の梅の早花ちりぬともよ〜（後）をりつくゝてん（永久）大進「いろも香もめづら〜き哉くをゆるまに今咲そむる梅のもつ花　桃のもつ花（永久）忠房「咲まけり岩井の水にりげまえて三千とせにゆる桃のもつ花（同）ひたち「とゞ園のゆゝの初花咲まけり三千代をぐべき春のゆるゝまに　萩のもつ花（万）十、五十四「ゆまをとり君をいとゝん秋萩のその始花のうれ〜き物を（夫）十一雅光「年をへてふるのゝ岡まに匂へども猶めづら〜きもぎの初花　もつもあぞめ　初花染（古）戀「くれゆゆの初花染の色深く思ひ〜心をれ忘れめや（續拾）春上、後嵯峨院「袖ふれゞ色迄うつれくれゆゆの初花染まさける梅りえ　もつもぎ　初萩（万）八卅六「とゞをりわさを鹿來ゆく先芽の花づまとひわ來ゆくさを鹿　補（万代）「もつ萩の花づまこひまゆく鹿のいや日でとまやおもひをされん　もつね　初穂。稻の穂のむそび（夫）十二爲家「風をたる野田のもつねの打ゆびきそよぐまつ

けて秋ぞしらる、補(新續古)賀隆歌「万代のためしはぞつく田上や秋のもつゑのあゝ
ひこのいね

もつゑ初穂契冲云、三代實錄に云々俗に万の物を初て神佛に奉るをもつゑといふ皆
是也大嘗會に新穀をもて神を祭り給ふよりもとゐまれる言なるべし俗に初尾とかく
い暗推にてたゞへり(三代實錄)十八十三仍所鑄作之早穂二十文乎云々。是い新錢おいへり(神祇
祝詞式)竜田風神祭初穂者能閉高知賤腹満双氐(源さゝらび)初さらびつくゝをし
らしきこゝいれてこれいさらハべのくやうとて侍るもつほありとて奉きり補(大
鏡)しゐたり天皇とて官物のもつゑさきにたてまつらせ給ふ(榮日蔭)「やまのでとさ
らたのい糸をぬきつゝて君らちとせのもつゑにぞつくもつとゞりの所に出そもつとや
だゝ

とやで出そ

補もつほのまくら初穂枕(續後拾)戀三、宗尊親王「花をゝきもつゑのまくらそのまゝふう
らげる、迄ともぬ君らか

もつと(宇治拾)十四これを聞つたへたるものども一度にもつとゝとよゝわらひけり

もつり(うつゑとゝらげ)いとつらひよきてつくりの針の耳いと明ららかなるにあ
の、もつりをいとよきゑどにそゆて糸の名あるべゝ、もゝい今ハッシといへる意にや

もつる ホッレタルかり、衣ゐもそだれゐも(夫)十四、天慶二年云々「琴の音に聲より合せかく
おべて糸ゐいへり又髪ゐもいへり(古)戀五(貫之)下十八「藤衣もつる
虫も秋のもつるいえにそ忍びね果るゐらけたり

もつるゝ

泊。是い如ン字とまる事を(拾)とや(後拾)戀三(元輔)廿六「藤
もつるもてんといへり(万)二、十六「大船の泊るとまりのたゆたひに物思ひ
る糸いとび人の君こふる涙の玉のをとぞありける(拾)とやあるらん

やせぬ人のこ故に(同)十九、卅六さゝよらん磯の崎〳〵こぎ波底牟泊〳〵に云々(同)
六、四十六長歌云々百船の泊る停と八島國百ふなびとの定めてゝをぬめの浦ゐ云々補(万)十七
長歌云々

衣もつる、袖の糸よりをたえてあひ見ぬゑどぞとりかきもつれ(兼輔)三「藤衣う
きを限りゐもつれつゝ涙の玉をぬきてかゝつる(うつゑ藤原君)もつれたる伊豫を
だれをかけて(源もゝちのゝ)廿一いをどくもつれそゝけたゞ源内侍ゞ老たる髪のさまをいへり

もつる

やせぬ人のこ故に(同)十九、卅六さゝよらん磯の崎〳〵こぎ波底牟泊〳〵に云々(同)
六、四十六長歌云々百船の泊る停と八島國百ふなびとの定めてゝをぬめの浦ゐ云々補(万)十七
いそことにあまのつをふ糸もてゐけりさらふねもてむいそのゝらかく(同)九、十六れ
ゑも山霞たゐ引さよふけてさゝふ糸もてんとまりゝらぎも

もつる果る

もつの所に出そ

もづる俗と同方ゐいへり(著聞)廿一五社家推舉ゝけれもづるべきやうもゐりけるにたび
〳〵の除目ゐもれにけり云々其夜の除目にいもづれにけりもづるゝ(落くゑ)一かた
の、少將をかたちよゝとゑめさりせ奉りつるゐ云々かれいいとあやゝき人のくせに

て文一くだりやりつるゞもづる、やうあけれバもづれて（枕）五廿五「元輔ゞ後といもる、君ーもやこよひの歌まもづれてわをる（同）九廿二垣の枝あゞのか、りて車のやりたまいるもいそぎてとらへてをらんと思ふにふともづれてをぎぬるもくちを（狹）四下八御几帳まもづれてけさやりまは見えさせ給へる御ぐーのか、り云々補（風雅）旅道全法師「岩だ、このやりまづらふ峰つゞき雲まもつれて見ゆるかけもーもづれたる（源のとき）廿一髪のまだたけまいもづれたる末の引ひろげたるやうまて補（新拾）雜中慈應「あつさ弓いてゆりひおき身まーあれバけふのまとゐまもづれぬるりあ

もづれ出（源せきや）三せきやよりさともづれ出たる旅姿どもの

もづをざる（平家物）二卅一度も御供わいもづれざりー物をとて

もづれ体の詞（新六帖）一信實「むら雨のそら打あびく秋の田の雲のもづれまのこる稲づま

もづを是も万ふいふべー

染めもづす（散木）上六十六「れく霜やそめもづをらんもこぢをのむらこまは見ゆるもーた山のあ

もづーてん（源とり紫）四十五父君の尋出給へらんももーたあうをゞろあべきをとおぼーをたるれどさてもづーてんいとくちをーりるべけれバこ、いとゞものはせんと覺

もづーたる（枕）五十七あさまーき物、のり弓わをなれ紫上をとりもづを意也

く〳〵ひさーうありてもづーたる矢のもてもあれてこと方へゆきたる的をもづたるあり

もづーて（宇治拾）一十二矢をもげていんとて云々弓を引さーて云々矢をもづーて火をとりて見るまは是いもげたる矢を弦よりもづーたる也（同）五、十三門の關木をもづーて扉かたつ方を人ひとり入るゞどあけたり

棹さーもづー（源うきふね）五十をゝさー守ゞうまでのをらいさをさーもづーておちいり侍をまけり補（宇治拾）七ノ廿一弓ノ所大方一度ももづさを（同）二車りけもづーて楊をたを、（うつほ國讓）中五十五それをさへもづさせ給ふあ（長方卿集）紅葉未遍「山めぐりむらーぐれーを過れバやゝねの木の葉をそめもづをらん（著聞）十廿二おもーいたもふれのとおもひてもづせ〳〵といひけれバ云々其時もづーぬ（同）十廿九矢をうちくもせてよく引て中まあて、もあちたるまは少ももづるべーとれもぬを（宇治拾）九十六きりもづー〳〵つ、れひまゞーて

もづる恥るもづ出す山鳥わいへり。

もつを末尾也とゞ。又（暑解）まは乎呂の呂いい助字まて尾の秀つ尾あり尾の中まは長きといへり。案をるまは（古今集）のやつ枝異本よもつえといふとあをを猶こつい末の意まて尾の中の末尾なるべし補（壬二集）「山鳥のもつをの秋のまをりゞをあゞきよりけていづる月りげ（万代）「山鳥のもつをのりゞをを見ゞもあらをを見もせぬ人まこひつ、ぞゆく（同）「山鳥のもつをのりゞをそれあらゞへたつる人のりげも見てまーをろのもつを（万）十四廿一「山鳥の乎呂の波都乎まは鏡

らけとゐふべきこそゐはよそりけめ　もつそのたれを　是もゐさねて（續古）戀四　爲家「高いへるなり

砂の山の山鳥をのへゐるもつをのたれを長くこふらん　もつをのゐゞこ（新續古）戀二

後小松院「おもりげをよそは見つゝや山鳥のもつその鏡へだてもつべき

補　もつそもゐ　初尾花（万）十「さゝ〜らの入野のそゝきもつをもゐいつ〜ゐ妹ゐ手まくらはせん（同）廿十三「もつそ花もゐは見むと〜天の川へなりはけら〜と〜のそゐなゞく

増補雅言集覽卷之四　終